

令和7年度老人保健健康増進等事業

介護福祉士養成課程におけるICTを活用した教育のあり方に関する調査研究事業

# ICT等を活用した介護福祉士養成教育事例集

～介護福祉士養成教育におけるICT活用及び  
介護テクノロジー教育の推進にむけて～



令和8年3月

公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会



本事例集は上記よりダウンロードできます



介護福祉士養成教育におけるICT活用及び介護テクノロジー教育の推進にむけて  
ICT等を活用した介護福祉士養成教育事例集

目次

<b>I 事例集の活用にあたって</b>	<b>1</b>	
1 作成の背景と目的	1	
2 本書で扱う2つのテーマ__ICTと介護テクノロジー	3	
3 効果的な活用をするために__トピックスのナビゲーション	4	
<b>II 事例から得られる示唆</b>	<b>6</b>	
教育におけるICT等の活用	6	
介護テクノロジー教育	8	
<b>III 8つの事例 ～ICT等を活用した教育、介護テクノロジー教育～</b>	<b>11</b>	
事例1 東奥学園高等学校	LIFEを通して介護過程の理解を深める・ ICTを活用した授業のユニバーサルデザイン化	12
事例2 宮城県迫桜高等学校	学習管理アプリケーションを活用して一人ひとりの 力を伸ばす	16
事例3 愛知県立古知野高等学校	ICT活用と介護テクノロジー教育を通して『学び の質』を高める	20
事例4 東北保健医療専門学校	ICTを活用した学びの提供 ～コミュニケーション ツール・教務システム・デジタル 教科書を活用した主体的学びの支援～	24
事例5 東京福祉専門学校	産学連携を軸とした介護テクノロジー教育の取組 ～産学連携でマネジメントをする人材を育てる～	28
事例6 富山短期大学	地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携 による教育	32
事例7 仙台大学	ICTを使った介護実習の効果的展開及び多様な機器 を取り入れた介護テクノロジー教育	36
事例8 桃山学院大学	ウェブ会議ツール・学習管理システムを活用した教育、 介護施設との連携による介護テクノロジー教育	40
<b>事例集の作成にご協力いただいた福祉系高等学校・介護福祉士養成施設及び関係者</b>	<b>44</b>	



# I 事例集の活用にあたって

## 1 作成の背景と目的

### ■事例集作成の背景

日本の高齢化は世界に例を見ない速度で進行しており、介護ニーズの高まりや介護人材の不足が大きな課題となっています。質の高い介護を提供し、介護人材を確保することは喫緊の課題であり、介護の生産性向上を考える視点からも、介護施設・事業所における「ICT」や「介護テクノロジー」の活用には大きな期待が寄せられています。

一方、介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校（以下、「養成施設等」という。）は、社会の要請に応じた介護福祉士養成教育に取り組んできました。平成31年度の新カリキュラムの導入に伴い、「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き」※1（以下、「手引き」という。）が作成され、コミュニケーション技術や生活支援技術の科目における【想定される教育内容の例】として、情報の活用と管理におけるICT活用、介護ロボットを含んだ福祉用具の活用が示されたのは周知のとおりです。

しかし、ICTや介護テクノロジーの進歩はめざましく、現在、介護施設・事業所で活用されているICTや介護テクノロジーは、種類も活用の仕方も手引き作成の時から大きな変化を遂げている状況にあります。

介護の質や生産性の向上を視野に、「介護福祉士は介護施設・事業所におけるICTや介護テクノロジー活用にどのようにかかわっていくか」「介護福祉士となる生徒や学生に、ICTや介護テクノロジー活用についてどのような教育をすべきか」という視点を踏まえた教育の展開が求められています。

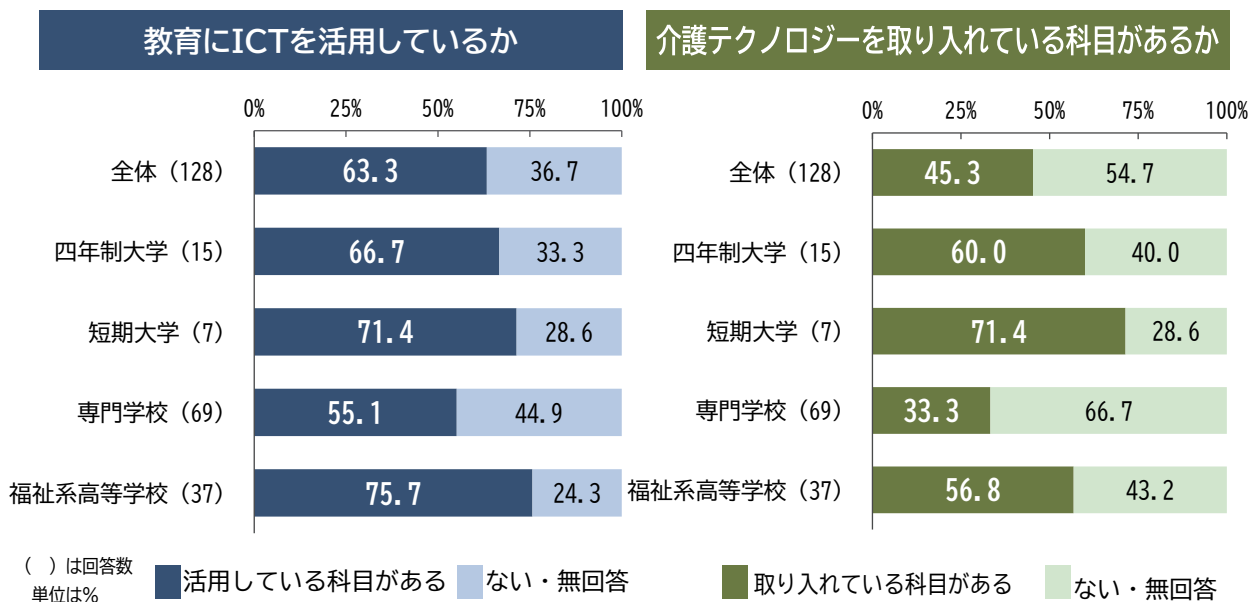
### ■介護福祉士養成教育におけるICT活用及び介護テクノロジー教育の実態

「介護福祉士養成課程におけるICTを活用した教育のあり方に関する調査研究事業（厚生労働省 老人保健健康増進等事業）」における取組の1つとして、介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校に対するアンケート調査を行い、以下のような結果が得られました。

- 教育にICTを活用している割合は63.3%、介護テクノロジーを教育に取り入れている割合は5割を下回る45.3%でした。
- ICT活用、介護テクノロジー教育のいずれにおいても、学校種別による違いが大きい状況にあります。

---

※1 「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き」（公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2019）



### ■新たな教育のきっかけに

本事例集では、8つの養成施設等におけるICTを活用した教育、介護テクノロジー教育の教育例を収集・整理しています。

事例集というと、いわゆる“好事例”が想像され、「ハードルが高い」「条件が違うから無理」などのネガティブな見方になる場合がありますが、本事例集に掲載した事例は、限られた環境下で創意工夫をしていたり、暫定的・試行的な取組など、“今できることに取り組んでいる”事例も少なくありません。つまり、どのような状況であっても、少しの工夫で自校での取組につながるヒントがあります。そして、介護施設・事業所、企業、地域の機関などの様々な外部機関と協働した教育の展開により、教育効果を高め、介護サービスの質向上に寄与する人材育成を目指している取組がみられました。自己完結をするのではなく、外部の機関や人と協働して教育を展開する視点の重要性がみえてきます。

手引きの【想定される教育内容の例】に記載されたコミュニケーション技術や生活支援技術の科目に限定せず、介護福祉士養成課程における全ての科目において活用の可能性があることを前提に、事例集に散りばめられたヒントから、自校でのスモールステップにつながるきっかけになることを意識し、活用していただくことを期待します。

### ■本研究事業の報告書の公開

本研究事業の報告書は以下に公開をしています。介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校へのアンケート調査結果などの詳細は、報告書をご参照ください。

「介護福祉士養成課程におけるICTを活用した教育のあり方に関する調査研究事業（厚生労働省 老人保健健康増進等事業）」

[https://kaiyokyo.net/files/R7\\_ICT\\_houkokusho.pdf](https://kaiyokyo.net/files/R7_ICT_houkokusho.pdf)



## 2 本書で扱う2つのテーマ\_\_ICTと介護テクノロジー

本書では、介護福祉士養成課程における「ICT等を活用した教育」及び「介護テクノロジー教育」の2つのテーマにフォーカスをしています。

本書でいう「ICT等」と「介護テクノロジー」の具体例は、以下のとおりです。

### ICT等

- ・ 学習管理システム（LMS）
- ・ AI
- ・ VR(ゴーグル)、ARなどの機器・技術
- ・ アバター
- ・ 動画教材
- ・ オンデマンド教材
- ・ デジタル教科書
- ・ タブレット
- ・ スマートフォン
- ・ 意見集約やアンケートツール
- ・ 双方向コミュニケーションツール など

12ページからの事例には  
左記の具体例にないICT等  
も出てきます



### 介護テクノロジー

- ・ 移乗・移動支援 : 自動運転の車いすや歩行補助ロボットなど
- ・ 排泄支援(予測・検知を含む) : 排泄状況の把握・予測・検知システムなど
- ・ 見守りセンサー・システム : センサーによる見守りなど
- ・ コミュニケーションロボット : 利用者とのコミュニケーション支援など
- ・ 入浴支援 : 入浴補助機器、温度管理システムなど
- ・ 介護記録・情報共有支援 : 介護記録アプリケーション、クラウド型情報共有システムなど
- ・ 業務支援 : 人手不足解消や業務効率化を図る管理システムなど
- ・ 機能訓練支援 : 身体機能維持・向上を目指す機器
- ・ 食事・栄養管理支援 : 食事管理や栄養改善を支援する機器
- ・ 認知症生活支援・認知症ケア支援 : 認知機能低下の高齢者を支援する機器
- ・ その他の機器 : インカム、ナースコールなど

※介護テクノロジーについては、厚生労働省及び経済産業省が定める「介護テクノロジー利用の重点分野」(9分野16項目)をもとに、養成施設等での教育の視点から再分類をしています。

### 3 効果的な活用をするために\_\_トピックスのナビゲーション

本書に掲載している事例のトピックスを抽出し、下表にまとめています。

「A：特徴」「B：教育に活用しているICT等」「C：教育に取り入れている介護テクノロジー」「D：連携先や連携方法」「E：掲載している科目」の視点で整理をしていますので、ナビゲーションとして活用してください。

学校名&掲載ページ	A：特徴	B：教育に活用しているICT等
事例1 東奥学園高等学校 12～15ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疑似LIFEを作成して教育に取り入れている</li> <li>・電子黒板やVRゴーグルの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電子黒板</li> <li>・VRゴーグル</li> <li>・タブレット</li> </ul>
事例2 宮城県迫桜高等学校 16～19ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習管理アプリケーションを介護実習指導に活用</li> <li>・動画の活用やVRを教育に取り入れている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習管理アプリケーション</li> <li>・タブレット（キーボードをセットで使用）</li> <li>・動画</li> <li>・VR</li> <li>・コミュニケーション支援アプリケーション</li> </ul>
事例3 愛知県立古知野高等学校 20～23ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケアデータを用いた科学的裏付けに基づく介護の学びを大学と連携して展開</li> <li>・コミュニケーションツールや授業支援アプリケーションの効果的活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションツール</li> <li>・授業支援アプリケーション</li> <li>・介護記録・音声入力アプリケーション</li> </ul>
事例4 東北保健医療専門学校 24～27ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションツールやデジタル教科書等を活用し、ペーパーレス化へ</li> <li>・コミュニケーションツール使用の工夫やルールが参考に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタル教科書</li> <li>・コミュニケーションツール</li> <li>・教務システム</li> <li>・ウェブフォーム作成ツール</li> <li>・タブレット</li> <li>・音声入力アプリケーション</li> </ul>
事例5 東京福祉専門学校 28～31ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・独自科目による介護テクノロジー教育の展開と効果</li> <li>・企業による連続授業の展開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションツール※</li> <li>・多言語対応の双方向翻訳機※</li> </ul> <p>※教育には活用しているが、本事例では取り扱っていない</p>
事例6 富山短期大学 32～35ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の介護テクノロジー推進機関及び介護施設との連携</li> <li>・具体的なカリキュラム構成や時間配分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習管理システム※</li> <li>・動画※</li> </ul> <p>※教育には活用しているが、本事例では取り扱っていない</p>
事例7 仙台大学 36～39ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習管理アプリケーションを介護実習指導に活用</li> <li>・多様な機器に触れる・体験する介護テクノロジー教育の展開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習管理アプリケーション</li> <li>・実習学習支援システム</li> <li>・動画(自作等)</li> <li>・VR</li> </ul>
事例8 桃山学院大学 40～43ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ウェブ会議ツールを使った施設訪問</li> <li>・学習支援システムの効果的活用</li> <li>・介護施設と連携し、施設の介護テクノロジーを活用して連続授業を展開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習管理システム</li> <li>・ウェブ会議ツール</li> <li>・動画</li> <li>・音声入力アプリケーション</li> </ul>

- ・下表のBとCでは、一般的な総称や分類名を記載していますが、各事例においては“各養成施設等における実際の使用・活用方法”を伝えるために商品名・製品名を記載しています。本事例集は、掲載している商品・製品の使用や活用を推奨するものではありません。

C：教育に取り入れている介護テクノロジー	D：連携先や連携方法	E：掲載している科目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・見守りセンサー・システム</li> <li>・コミュニケーションロボット※</li> </ul> ※教育には取り入れているが、本事例では取り扱っていない	同校の他科と疑似L I F Eを協働で制作、介護実習施設にデータ提供の協力を依頼	介護過程、介護総合演習
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションロボット※</li> </ul> ※教育には取り入れているが、本事例では取り扱っていない	(大学、視覚障害者情報センター、施設、企業等) ※本事例では取り扱っていない	介護福祉基礎、生活支援技術、介護過程、介護実習、こころとからだの理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>・見守りセンサー・システム</li> <li>・介護記録・情報共有支援</li> <li>・体圧測定・歩行分析</li> </ul>	大学の教員、施設・事業所の職員が来校して授業	生活支援技術※、介護実習※ ※見出しではなく文章の中で科目が掲載されている
<ul style="list-style-type: none"> <li>・移乗・移動支援</li> <li>・排泄支援</li> <li>・見守りセンサー・システム</li> <li>・介護記録・情報共有支援</li> </ul>	大学（研究機関）に出向き見学する、企業のショールームに行く	人間関係とコミュニケーション、介護の基本、コミュニケーション技術、生活支援技術、介護実習、介護総合演習、情報処理（選択科目）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・移乗・移動支援</li> <li>・排泄支援</li> <li>・見守りセンサー・システム</li> <li>・コミュニケーションロボット</li> <li>・介護記録・情報共有支援</li> <li>・業務支援</li> <li>・機能訓練支援</li> </ul>	企業や介護施設・事業所の職員が来校して連続授業	介護ICT（独自科目）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・移乗・移動支援</li> <li>・排泄支援</li> <li>・見守りセンサー・システム</li> <li>・コミュニケーションロボット</li> <li>・入浴支援</li> <li>・介護記録・情報共有支援</li> <li>・業務支援</li> <li>・機能訓練支援</li> <li>・食事・栄養管理支援</li> </ul>	介護テクノロジー推進機関や介護施設・事業所に出向き、知る・触れる・体験する	生活支援技術
<ul style="list-style-type: none"> <li>・移乗・移動支援</li> <li>・コミュニケーションロボット</li> <li>・機能訓練支援</li> </ul>	企業が来校して講話	介護過程、介護実習
<ul style="list-style-type: none"> <li>・移乗・移動支援</li> <li>・排泄支援</li> <li>・見守りセンサー・システム</li> <li>・入浴支援</li> <li>・介護記録・情報共有支援</li> <li>・機能訓練支援</li> <li>・インカム等の機器</li> </ul>	施設内の様子を映像で体験 介護施設・事業所の職員が来校して連続授業（機器も持ち込み）	人間関係とコミュニケーション、介護の基本、生活支援技術

## II 事例から得られる示唆

### 教育におけるICT等の活用

事例においては、【学習管理システムやコミュニケーションツール等】【動画】【VR】【デジタル教科書】【パソコン・タブレット・スマートフォンなどのデバイス】などの活用がみられ、それぞれにおいて様々な効果や工夫のポイント、課題等が明らかになりました。

#### ■学習管理システムやコミュニケーションツール等\_生徒・学生と教員の双方に大きな効果

事例では、学習管理システムやコミュニケーションツールを活用していないのは1校のみでした。学習管理システムを活用しているのは2校であり、他ではコミュニケーションツール（Microsoft Teams）や学習管理アプリケーション（Google Classroom）などを活用して教育が展開されていました。→事例2、3、4、7、8

これらのツールを活用した結果、双方向でタイムリーな対応、データの共有、データの蓄積がなされ、生徒・学生と教員の双方に大きな効果が明らかになっています。

効果	具体的な効果の例
双方向でタイムリーな対応	<ul style="list-style-type: none"><li>・教員とつながっている安心感（生徒・学生）</li><li>・学びへのモチベーションを後押し（生徒・学生）</li><li>・一人ひとりの特性や課題の把握（教員）</li><li>・次回の授業の見直し（教員）</li></ul>
データの共有	<ul style="list-style-type: none"><li>・予習や復習のしやすさ（生徒・学生）</li><li>・繰り返して学ぶ（生徒・学生）</li><li>・協働作業が他者の理解、チームづくりに（生徒・学生）</li><li>・介護実習先・教員間の連携による教育の展開（教員等）</li></ul>
データの蓄積	<ul style="list-style-type: none"><li>・教員の業務効率化（教員）</li><li>・蓄積データを活用した授業の展開（教員）</li></ul>

導入当初は設定などの初期対応に苦労がありますが、次年度以降は教員の業務効率化につながるという意見もありました。→事例4

また、介護実習記録を画像共有するなどの工夫を展開している例もあり、多様な機能がなくても、運用の工夫により、今あるツールや仕組みを最大限に活用している取組もみられました。システムの機能に頼ることなく、運用面を工夫するスモールステップの例ととらえることができます。→事例2、7

学習管理システムやコミュニケーションツール等は便利である反面、活用するほど情報に埋もれる生徒・学生が出てくるという指摘もありました。時間内に課題提出を終わらせる、教員間で課題提示を共有するなど、運用をする側の配慮も参考となります。

→事例2、4、8

## ■動画\_工夫によって様々な活用ができる

動画による視覚的教材は、生徒・学生の理解を促す効果があることから、様々な科目で活用が進んでいました。

留学生にもわかりやすい、静止して説明ができる、資料として共有すれば繰り返し見ることができるなど、メリットは多様で、とりわけ、領域「介護」「こころとからだのしくみ」における科目では活用は効果的であるという示唆が得られています。本事業のアンケート調査においても同様の結果が明らかになっています。

動画については、スマートフォンで簡単に撮影できる実態があり、教育に適したコンテンツがないことを背景に教員が自作したり、生徒・学生同士で動画を撮って確認作業をするなどの創意工夫に満ちた活用が展開されていました。→事例2、7

また、Zoomを利用してライブ配信するなどの取組もみられ、ウェブ会議ツールを使用した工夫の事例となっています。→事例8

## ■VR\_新たな教育の可能性につながる

VRは、現実のように体験できるメリットがあり、例えば認知症の方の見え方を体験するなど、非常に効果的であるとの意見がありました。また、VRゴーグルを使って介護者が見ている視点を確認するなど、これまでにない新たな教育の可能性がみえてきます。

高価である、VRのコンテンツが限られていることが課題とされていますが、企業からデモンストレーションの機器を借りたり、生徒等でVRのコンテンツを作成するなど、活用を進める取組がみられました。→事例1、2、7

## ■デジタル教科書\_様々なメリットがある

デジタル教科書を活用しているのは1校のみでした。→事例4

1つのデバイスで全ての教科書を見ることができ、持ち運びの便利さとともに、忘れ物が無くなる、メモを書いたり、付箋を貼ったり、検索が簡単にできる機能が使え、便利であるなどの意見が挙げられ、実際の活用状況からは紙面の教科書にはないメリットがみえてきました。教科書を活用して補足資料等を作成しやすくなる、ペーパーレス化が進むという意見もありました。

## ■パソコン・タブレット・スマートフォンなどのデバイス\_選択と活用は多様に

事例を概観する限り、生徒や学生がデバイスを持っていない、Wi-Fiがないなどの課題はゼロではないものの、デバイス等の有無は時代の流れとともにICT活用を阻む大きな課題ではなくなってきた様相がみられました。生徒・学生の多くはスマートフォンを持ち、パソコン・タブレット・スマートフォンのどれを使うかの選択は広がり、パソコンよりもスマートフォンやタブレットの活用が進んでいる状況がみられました。

事例ではタブレット等を支給して効果的に教育を展開している養成施設等もありましたが、そうした対応がなくても、生徒や学生が所持しているパソコン・タブレット・スマートフォンを教育において活用できる状況にあるといえます。

ただし、デバイスの操作が苦手、スマートフォンを所持していない、自宅にWi-Fiがないなどの課題が福祉系高等学校を中心に挙げられました。こうした生徒等に対しては、学内

で作業や学習を進めるなどの対応がなされており、一定の配慮が必要であることは言うまでもありません。

## 介護テクノロジー教育

事例においては、介護テクノロジー教育を展開するにあたり【連携による効果的な教育】【科目】【授業展開】【費用】という点において、様々な工夫や課題等が明らかになりました。

### ■連携による効果的な教育 様々な連携先・連携方法がある

事例では、各校が多様な機関等と連携し、様々な方法で介護テクノロジー教育を展開している状況が確認できました。今後、介護テクノロジー教育を進めていくにあたっては、連携をする先、連携の方法ともに参考となる事例が多くみられます。

**【連携先】** 介護テクノロジー教育を進めるための連携先として、①企業、②介護施設・事業所、③地域機関、④大学や研究機関等がありました。

それぞれには強みや特性があり、連携先と協働して教育していく取組には大きな効果が期待できます。

連携先	ポイント
①企業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護テクノロジーを開発・販売している企業</li> <li>・特定の機器に特化した機能や活用を体験、理解できる</li> <li>・国際福祉機器展、CareTEX、介護施設・事業所、教員間のネットワーク等を活用してつながる</li> </ul> <p>→事例4、5、7</p>
②介護施設・事業所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護テクノロジーを活用している介護施設・事業所</li> <li>・実際の活用や運用、マネジメントの必要性を理解できる</li> <li>・介護実習や卒業生を通してつながる、地域の推進機関や企業を通してつながる</li> </ul> <p>→事例1、3、4、5、6、8</p>
③地域機関	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護テクノロジー普及の推進を担う地域の機関等</li> <li>・多様な機器、最新の機器を体験、理解できる</li> <li>・プラットフォーム機関への相談、企業や介護事業所との情報共有を通してつながる</li> <li>・教育機関との連携をしていない機関もある</li> </ul> <p>→事例6</p>
④大学や研究機関等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学に講義を依頼</li> <li>・研究機関に出向いて介護テクノロジーを学ぶ</li> </ul> <p>→事例3、4</p>

**【連携方法】** 連携先との連携方法として多くみられたのは、①企業や介護施設・事業所の職員が来校して授業で講義をしていただく事例です。講話という形態をとっている場合もあれば、複数回の連続講義を通して多様な機器や機器の詳細を学ぶ取組もみられました。企業の講義に地域の介護施設・事業所も参加していただいた例もあり、介護施設・事業所に学生の学びの実態を知っていただいたり、介護施設・事業所が最新機器を知る機会につながっている事例でした。

②講義にとどまらず、授業内で機器を体験する取組もみられました。企業や介護施設・事業所が来校して校内にある既存の機器を活用して体験する機会を設けたり、企業や介護施設・事業所が機器を持ち込んで体験の機会をつくる事例がありました。対応が可能な企業や介護施設・事業所が限定されることや、体験できる機器に限られるという課題があるものの、生徒・学生の深い学びにつながる取組ととらえることができます。

③企業、介護施設・事業所、地域の介護テクノロジー推進機関等に出向き、話を聞く、実際に見る、体験をする取組がありました。現場での具体的活用場面や校内では体験できない多様な機器を知る機会となる一方で、受入先との日程調整や生徒・学生の人数が多い場合の調整、生徒・学生の移動手段の確保などの課題が挙げられました。

連携方法	ポイント
①授業で講義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業や介護施設・事業所の職員、大学の教員等が来校して講義や講話</li> <li>・1回のみ、連続講義などの取組がある</li> <li>・企業の講義に、地域の介護施設・事業所が参加した例もある</li> </ul> <p>→事例3、4、5、7、8</p>
②授業で体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業や介護施設・事業所が来校して、校内にある既存の機器の体験をサポート</li> <li>・企業や介護施設・事業所が機器を持ち込み、授業内で体験する機会をつくる</li> <li>・持ち込める機器の種類や台数等には限界がある</li> </ul> <p>→事例3、5、7、8</p>
③出向いて話を聞く・見る・体験をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護テクノロジーを制作・活用している企業や介護施設・事業所に出向いて話を聞く・見る・体験をする</li> <li>・介護テクノロジーがある推進機関や研究機関に出向いて話を聞く・見る・体験をする</li> <li>・実際の活用や多様な機器を知る機会となる</li> <li>・受入先との日程調整、生徒・学生数が多い場合等の対応の工夫等が必要である</li> </ul> <p>→事例4、6</p>

## ■科目\_様々な科目で介護テクノロジー教育が展開されている

介護テクノロジーの教育を既存の科目において展開する事例が多くを占めましたが、独自科目を設けて教育をする事例もありました。独自科目を設けている場合は、企業や施設・事業所と連携した授業を構成しやすく、多様な機器や場面の体験に加え、介護施設・事業所でのマネジメントの視点を学ぶことができます。→事例5

また、手引きの【想定される教育内容の例】に記載されたコミュニケーション技術や生活支援技術の科目に限定せず、様々な科目で介護テクノロジー教育が展開されている実態が明らかになり、アンケート調査からも同様の結果が得られています。介護過程の授業でICT等や介護テクノロジーを取り入れ、生徒・学生の介護の理解深化に取り組む事例もみられました。→事例1、2、3、4、6、7、8

## ■授業展開\_授業展開の工夫とリテラシー教育の必要性

授業の組み立てを工夫し、科目間連携や連携先との適時な連携を通して、介護テクノロジーの教育を進める事例がありました。学生等の理解を促す授業の組み立て、カリキュラム構成は参考になります。→事例6

介護テクノロジーの教育のポイントとして、介護施設・事業所で活用できるリテラシーやマネジメントを教育することの大切さが、複数の事例で語られています。また、介護テクノロジーありきではないことを学ぶ、介護テクノロジーを通して利用者の気持ちの理解、尊厳の理解につなげる大切さも事例において指摘されています。意識的な教員の問いかけ、授業展開も事例から読み解くことができます。→事例1、2、3、4、5、6、7、8

## ■費用\_介護テクノロジーに関する機器等を確保するために

介護テクノロジーの教育に必要な機器等を確保するためには、費用等が課題となります。

機器を購入するか、レンタルするかについては、教育だけでなく研究にも活用する機器類は学内で協議の上購入する、バージョンアップする機器やコストの高い機器類はレンタル対応などの枠組みを設けている事例がありました。→事例6

レンタルについては、デモンストレーション機器の貸出し、期間限定による貸出しなど企業による様々な対応があります。学校の所在地によっては運搬費がかかるなどの課題もみられます。

購入については、ICTやDX等を推進する事業の補助金等を活用している事例もありました。→事例1、3

一方で、購入やレンタルにとらわれることなく、前述したような連携先と協働することで、費用を押さえつつ効果的に教育に取り組めることが明らかになりました。

## Ⅲ 8つの事例 ～ICT等を活用した教育、介護テクノロジー教育～

事例1 東奥学園高等学校	L I F Eを通して介護過程の理解を深める・ I C Tを活用した授業のユニバーサルデザイン化
事例2 宮城県迫桜高等学校	学習管理アプリケーションを活用して一人ひとりの 力を伸ばす
事例3 愛知県立古知野高等学校	I C T活用と介護テクノロジー教育を通して『学び の質』を高める
事例4 東北保健医療専門学校	I C Tを活用した学びの提供 ～コミュニケーションツール・教務システム・ デジタル教科書を活用した主体的学びの支援～
事例5 東京福祉専門学校	産学連携を軸とした介護テクノロジー教育の取組 ～産学連携でマネジメントをする人材を育てる～
事例6 富山短期大学	地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携 による教育
事例7 仙台大学	I C Tを使った介護実習の効果的展開及び多様な機器 を取り入れた介護テクノロジー教育
事例8 桃山学院大学	ウェブ会議ツール・学習管理システムを活用した教育、 介護施設との連携による介護テクノロジー教育

### 事例に関する留意事項

- ・各事例の1ページ目にある「✿教育に活用しているI C T等」「✿教育に取り入れている介護テクノロジー」では一般的な総称や分類名を記載していますが、各事例においては“各養成施設等における実際の使用・活用方法”を伝えるために商品名・製品名を記載しています。本事例集は、掲載している商品・製品の使用や活用を推奨するものではありません。
- ・「✿教育に活用しているI C T等」「✿教育に取り入れている介護テクノロジー」における●と○は、以下をあらわしています。
  - ：事例において取り扱っている機器等
  - ：教育に活用等をしているが、本書の事例では取り扱っていない機器等

# L I F Eを通して介護過程の理解を深める・ I C Tを活用した授業のユニバーサルデザイン化

# 事例 1

## 東奥学園高等学校

### ✧教育に活用している ICT 等

- 電子黒板
- VR ゴーグル
- タブレット

### ✧教育に取り入れている 介護テクノロジー

- 見守りセンサー・システム
- コミュニケーションロボット

- ◆所在地：青森県
- ◆学校種別：福祉系高等学校
- ◆定員数：40名(1学年あたり)
- ◆専任教員：4名
- ◆設置者：学校法人東奥学園



## L I F Eを通して介護過程の理解を深める試み

### ■取組の背景

令和6年4月から 介護施設・事業所において科学的介護情報システム（L I F E）がスタート

#### 介護過程への思い

介護過程は  
介護福祉士養成課程  
のとても大切な学び

しっかり介護過程  
を理解してほしい

座学で教えても  
なかなか実践に  
結び付かない

介護過程の授業の  
中で、より実践的  
な学びを展開する  
方法はないか

介護過程を実践的に学ぶ  
取組の一つとして  
L I F Eを活用するのは  
どうだろうか？

- ✗ L I F Eを学ぶ教材がない！
- ✗ 介護実習でも L I F Eを学べない！

### ■福祉科と情報科学科が協力して「疑似 L I F E」を作成！

#### ポイント

#### 大切にしていること

作成を目的とせず  
プロセスを重視

L I F Eの意義、介護過程と  
L I F Eの関係を理解

学科間連携による横断的学び  
でチームづくりも意識

実習でのデータを使い  
実習体験と学びを融合

- 「疑似 L I F E」ではアセスメント情報を個人単位で入力し、利用者の状況を知る  
→ L I F Eを通して介護過程の理解につなげる(科学的介護)

※本来の L I F Eは事業所にフィードバックする仕組みである。

## ■「疑似LIFE」作成を通した学びの流れ

	具体的な学び・取組	工夫
1年目	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICT・IoT、介護DXについての基本的学習</li> <li>介護生産性向上相談センターへの見学</li> <li>ICT、介護ロボットの基本的理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般教科について福祉科と情報科学科で一緒に授業を行い、互いの理解を促す →チームづくりの始まり(関係構築)</li> <li>実際のICT機器や介護ロボットに触れる機会を創出する →具体的なイメージをしやすい</li> </ul>
2年目	<ul style="list-style-type: none"> <li>LIFEの基本的理解</li> <li>介護過程の基本的理解</li> <li>情報科学科と協働で疑似LIFEを作成</li> <li>介護実習で生徒がアセスメントデータを収集(福祉科)</li> <li>アセスメントデータを疑似LIFEに入れる</li> </ul> <p>※取組は昨年度から始まり、現在は2年目、疑似LIFEの試行作成の段階となっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>介護過程とLIFEの座学</li> <li>LIFEを作成・稼働させるためのデータ収集 →介護実習施設に協力を依頼 →介護実習において、生徒は利用者のアセスメントデータを収集(個人情報等は集めない) →自らの実習体験と介護過程・LIFEを融合</li> <li>疑似LIFE作成では、情報科学科の教員も協力 →学内のパソコン実習室を利用</li> </ul>

### 解説

## 科学的介護情報システム(LIFE)とは

**LIFE:**  
Long-term care Information system For Evidence

- 科学的介護情報システム(LIFE)は、介護サービス利用者の状態やケアの計画・内容についてのデータを全国の介護現場から集め、集めたデータを分析し、その結果をフィードバックする情報システムです。
- 介護施設や事業所でLIFEを利用し、記録したデータやフィードバックを活用して今後のケア(介護サービス)を見直し、繰り返し改善していく取組(PDCA)が期待されています。

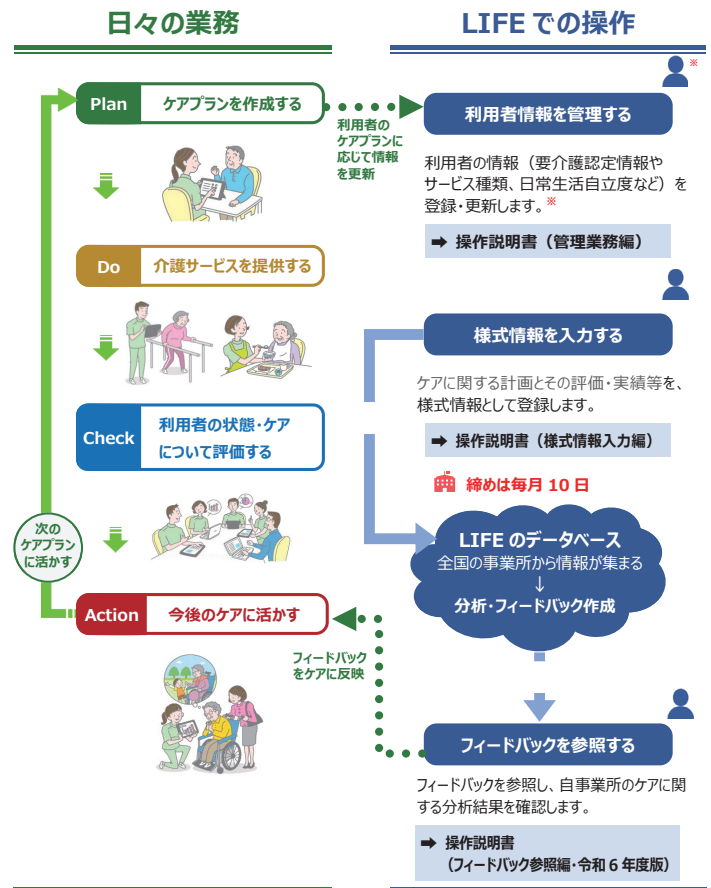


※LIFEの詳細は  
厚生労働省のウェブサイトを参照  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000198094\\_00037.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000198094_00037.html)

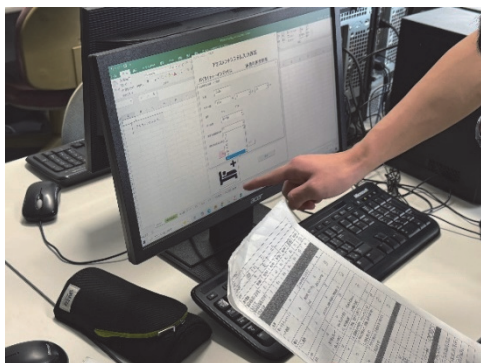
※右図は「LIFEクイックガイド」から抜粋

### 業務の流れとLIFE

日々の業務の中で、以下のようにLIFEを操作します。



## ■「疑似LIFE」作成の様子



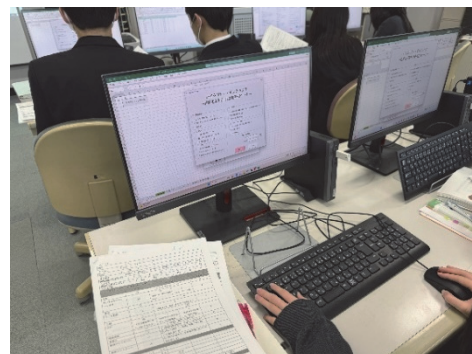
## ■期待される効果

### 【福祉科】

- ・科学的介護と介護過程に関する理解が深まる。
- ・ICT体験を重ね、ICTを使ってできること(調べる、分析する等)が増える。
- ・情報に関する基本的知識と情報活用能力が習得できる。

### 【情報科学科】

- ・「福祉」という分野への興味・関心喚起、福祉分野における情報科学の必要性や具体的なニーズを理解し、情報科学は福祉現場でどのような役割を担えるのかを考えるきっかけになる。



## ■今後の展開

- ・LIFEは科学的介護や介護過程を学ぶ教材となり、ICT体験にもなる。  
↓
- ・疑似LIFEを完成させる。  
→介護福祉士養成課程の教育に携わる学校に活用していただき、データを蓄積できれば、よりよい分析ができるのではないかな。

## ■介護テクノロジーの活用について

### 介護過程

#### HitomeQや眠りSCANのデータを活用

#### ○データの収集

- ・実際のデータを提供していただける協力施設との連携。
- ・教員が眠りSCANを利用してデータを作成。
- ・メーカーより一部データを提供してもらう。

#### ○データを活用する効果

- ・科学的根拠を持って、支援などを検討することが可能になる。
- ・「こうであろう」というものに裏付けができる。
- ・これまで見えづらかった生活課題を見つけることができる。

#### ○大切にしていること

- ・HitomeQと眠りSCANは同じ見守り機器であるが、それぞれできることが違い、介護職員が求めるもの(目的)によって機器を選定することが重要。
- ・「機器があるからこれをする」のではなく、「これをしたいからこの機器を使う」という考え方を教育。

### 介護総合演習(探求学習)

- ・福祉機器展に行く前に、介護実習で感じた介護現場の課題をグループで整理(課題を発見・整理するところからスタート)。
- ・福祉機器展に行き、課題を解決するための機器を探す。



【課題】食べこぼしをする人がいる。



- ・福祉機器展では機器が見つからない。生徒からユニバーサルテープ(介護テクノロジーではない)利用が提案された。



#### ○学んでほしいこと

介護テクノロジーを使えば何でも解決できるという意識をなくす。  
アセスメントや想像力が大切。

## ICTを活用した「授業のユニバーサルデザイン化」

### 授業の ユニバーサル デザイン化

- ✓ ICTを活用し、全ての生徒に対して、分かりやすい授業を展開する。
- ✓ 視覚化・共有化の推進を図り、教育の質を向上させる。
- ✓ 日常的にICTに触れ、生徒のICT活用のハードルを下げる。
- ✓ 文部科学省の高等学校DX加速化推進事業※を活用している。

※情報、数学等の教育を重視するカリキュラムを実施するとともに、ICTを活用した文理横断的な探究的な学びを強化する学校などに対して、取組に必要な環境整備の経費を支援する事業。

### 【具体的に活用しているICT例\_電子黒板】

- ・ 授業のユニバーサルデザイン化を進めるにあたり導入。
- ・ 視覚化、焦点化、共有化に有効なICT機器。
- ・ 資料や画像を提示する、ミラーリング機能で情報を共有するなどをして授業の展開が可能。
- ・ 自由に書き込みもできるので、従来の黒板と同じ感覚でも利用できる。
- ・ ブラウザ、クラウドともつながり、YouTube等の動画につないだり、クラウドにある他科目の資料等も共有できる。
- ・ 機能を効果的に使用すれば、教員の資料作成、授業準備の負担軽減につながる。

見やすく、資料の切替・展開が容易



### 【具体的に活用しているICT例（試験的利用）\_VRゴーグル】

- ・ 利用者の目線や気持ちを体験できる。
- ・ 実際に介護を受け取る側の感覚を体験することで、自分の感覚と何が違うのかなどの視点のすり合わせが可能になる。
- ・ 生徒たちからは、面白い・怖い・びっくりしたなどの感想が出ているので、普段体験できない、される側の目線を経験するのは効果的だと感じる。
- ・ また、教員は生徒が何をみているかをタブレットで確認ができるため、生徒がどういうところを見ているのか、何に注目しているのかなど、一人ひとりの特性や理解状況の違いについて把握がしやすい。

#### ■ VRを使用して学びを深化させるために

- ・ 学習の定着のために：体験したことをまとめるワークシート等を作成し、介護に活かせる気付きや課題の抽出、支援のあり方を考えたり、整理できるようにする。  
→ どういう気持ちになったか・最初に目を向けたところ・全く見ていなかったところ・どんな支援が必要か等々。
- ・ コンテンツの種類：どのようなコンテンツがあるかが重要。自校での学びに活かせる内容を作るなどして、VRのコンテンツを充実させていく必要がある。

#### ■ 課題

- ・ 購入・レンタルともに高額であることが大きな課題。



# 学習管理アプリケーションを活用して一人ひとりの力を伸ばす

# 事例 2

## 宮城県迫桜高等学校

### ✿教育に活用している ICT 等

- 学習管理アプリケーション
- タブレット(キーボードをセットで使用)
- 動画、●VR
- コミュニケーション支援アプリケーション
- マルチメディアDAISY図書

### ✿教育に取り入れている 介護テクノロジー

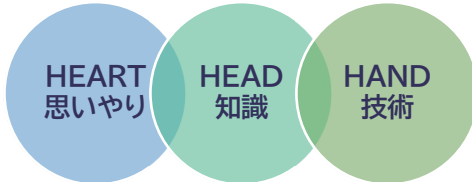
- コミュニケーションロボット

- ◆所在地：宮城県
- ◆学校種別：福祉系高等学校
- ◆定員数：20名(1学年あたり)
- ◆専任教員：3名
- ◆設置者：宮城県



### 学びの特徴と3年間の学びの概要

- ・単位制総合学科の高等学校であり、生徒が1年生前半に「系統」を選択する。
- ・介護福祉士養成課程は「福祉教養系列」の系統となり、介護従事者としての3H(下図)を磨くことを目的に学んでいる。



### Google Classroom を活用した教育活動

- ・Google Classroom を活用して、生徒との情報共有、個別指導等を展開している。

#### Google Classroom (グーグル クラブルーム)

- ・Google が学校向けに開発した学習管理アプリケーション。
- ・教員と生徒の間で、ファイル、情報などを共有することができる。

### 1年次

#### ■系列選択



系列選択では、福祉教養系列について知ってもらうため、福祉の座学や実技の授業を体験してもらいます。  
←この年は上級生から利用者の方の安全・安心、信頼関係の形成にも繋がるリネンの取り扱い方やベッドメイキングについて教えてもらいました。

#### ■介護福祉基礎

1年次の後期より、系列の授業が始まります。災害の分野では東日本大震災時を振り返る他、新聞紙で簡易スリッパ(靴下)を作成する中で、災害時に介護従事者としてできることを考え、学んでいきます。



#### ■総合的な探究の時間 (ドリカムⅠ：基礎探究)

それぞれの系列にわかれ、探究活動を行います。現在の3年生は、施設入所のイメージについて自分の祖父母から調査を行いました。その後、「寂しさ」をキーワードに施設で暮らす方に少しでも幸せに年を越してもらいたいという思いで、クリスマスカードを作成し、渡しました。



### 2年次

#### ■介護実習①

学内での実技の学習に加え、通所介護施設や入所施設で24日間、実習をさせていただきます。初めはコミュニケーションに課題を抱えながらも、少しずつ成長していきます。



#### ■新山地区「介護教室」

毎年、新山地区の高齢者の方と交流をさせていただきます。この日のためにレクリエーションを考え、練習を重ねます。実際に喜んでいただいた時、福祉の楽しさを実感します。

#### ■福祉のつどい

社会福祉協議会主催のイベントに参加し、学部の紹介や学んだことを披露します。昨年度は介護予防の運動を来場者の皆様と一緒に行いました。

#### ■介護職員初任者研修

2年次の2月に修了試験を行います。実習でお世話になった職員の方や利用者様への感謝の気持ちを込めて、一生懸命勉強に励みます。

#### ■総合的な探究の時間

(ドリカムⅡ：キャリア探究)  
職場体験(※福祉は校外介護実習)の中で職員の方に「仕事のやりがい」等についてインタビューを行いました。その後、他施設で実習をした生徒と共有し、ドリカムの時間を活用して学びを深めました。

### 3年次

#### ■介護実習②

入所施設やグループホームで、28日間実習をさせていただきます。介護計画の立案や自分で考えたレクリエーションを実施します。



#### ■生活支援技術「医療的ケア」

喀痰吸引、経管栄養の方法を学びます。専門的な知識・技術を身に付けることで、利用者の方のニーズに対応できる、介護福祉士を目指し日々努力していきます。



#### ■介護福祉士国家試験

3年次(1月)の受験に向けて、6月から課外授業を実施します。友人と切磋琢磨し、全員合格に向けて過去問題や用語を繰り返し振り返ります。

#### ■総合的な探究の時間

(ドリカムⅢ：総合探究)  
グループにわかれ、自分達の興味・関心のあることを探究していきます。これまではロコモティブシンドローム予防の動画の作成や、イベントを企画(小学生に福祉を学んでもらうためのゲーム・地域の高齢者の方と芋煮会)を行いました。今年度は、日本でデフリンピックが開催されたため、小学生に手話を教えるイベントや施設で暮らす高齢者の寂しさ改善のため、手打ち蕎麦をふるまうイベントを企画・実施しました。

## 高校生ならではの課題 ～Google Classroomを使用するにあたって～

- ・スマートフォンは使えるが、タブレットは苦手 → ローマ字入力が難しい
- ・自宅にWi-Fiがない、スマートフォンを持っていない → 自宅学習が進まない
- ・説明ができない、書くことや文章作成が苦手 → Google Classroomの利用が難しい



「1年生は中学を卒業してきたばかり」  
「ICTが苦手な生徒もいる」  
一人ひとりに対応していく視点が必要



## 各科目におけるICT等活用

### 生活支援技術

### Google Classroomを活用

#### 【実技】

生徒同士で学びあう  
繰り返し学ぶ

実技の動画や写真をグループで撮影し、動画を共有して確認や振り返り、レポート作成を行う

#### ■例) ベッドメイキング動画

- ・生徒が利用者役、介護者役、撮影役でグループをつくる。
- ・利用者は寝ている状態、寝ている利用者のことを介護者は体位変換しながらベッドメイキング、シーツ交換をしていく。
- ・一連の流れの動画、三角コーナー・利用者が起きた後のシーツの皺・中心線の位置などの写真を撮る。



#### ■教師からの問いかけ（抜粋）

- ・自分のベッドメイキングの動画を観てどう思うか。
- ・できなかった部分とその理由は何か。
- ・声掛けはできていたか、どんな声掛けが必要だったか。

撮られたくない生徒への配慮  
画像を拡散しないなどの  
ルールを共有！

#### ■教師は次の授業までにチェックとコメントを生徒に返す

#### ■生徒同士で動画や写真を観て、互いにチェックし、自らの課題に気付く

#### 【講義】

調べる・まとめる・  
発表する

課題を提示 → 調べる → スライドをまとめる → 発表する

#### ■例) 身の回りにおけるバリアフリーやユニバーサルデザインを調べてみよう

- ・Google スライドを使用して生徒たちがまとめる → 同時に、複数人が分担して作業可能。
- ・生徒たちの作業や編集が教員から見えるため、進んでいる生徒、できていない生徒がわかる（生徒の進捗状況の把握）。
- ・できていない生徒を把握して、個別に声をかけたり、指導をする。

## 介護福祉基礎

障害のある方たちが使用する機器等

障害や新しいテクノロジーの理解に

障害のある方たちが利用するテクノロジーの体験を通して、障害を理解する

### ■例) 聴覚障害の人たちってどんなコミュニケーションツールがあるのか

- ・指差しや手話などのほか、新しい技術である TalkAidなどを体験する。

## 介護過程

Google Classroom を活用

多様な高齢者像や多様な視点の理解に

介護実習で対応した事例を共有し、他の生徒がアセスメントや介護計画を考える

### ■介護実習で対応した介護過程の展開のスライドを作成し、発表、共有する

- ・収集してある情報をもとに、他の生徒がアセスメントや介護計画を考える。



- ・様々な事例に触れるとともに、様々な利用者の存在を知る。
- ・他の生徒の意見、アセスメントや介護計画等を通して、自分とは違う視点や考え方を知る。
- ・視野が広がり、自分の特性や課題がみえてくる。

## こころとからだの理解

動画、VRを活用

利用者の理解に

動画を観たり、認知症のVRを体験する

### ■実際の臓器の動きなどの動画を観る



- ・苦手な生徒がいる場合は、模型などを使い補完的に対応することもある。
- ・観る、観ないは本人にまかせている。
- ・利用者が困っている、苦しんでいるときに、実際に身体では何が起きているのか、どうなっているのかを介護者として知っておくことの大切さの理解につながっている。

### ■認知症のVRを体験

- ・実際に体験した事例：利用者としてVRゴーグルをつけた生徒が、デイサービスの送迎車で施設に到着。
  - ➔ 「降りてください、大丈夫です」と声を掛けるが降りられない。
  - ➔ VRゴーグルをつけた生徒が見ているのは「高い所にいる自分」、怖くて降りられない。
  - ➔ 自分たちも、実習で利用者が何か困っているときに「大丈夫ですよ」と言っている。
  - ➔ どんな言葉をかけたら、利用者は安心して一歩を踏み出せるのか。
  - ➔ 一歩をどうしたら踏み出せるのかを言葉にしてみよう。
- ・利用者を体験することで利用者の理解につながっている。

Google Classroom を活用し、実習日誌を毎日やり取り

■サポートが必要な生徒がいる

- ・実習巡回に行くと、以下の生徒の様子がよく見られる。
  - ✓不安が大きい
  - ✓自分のしていることが正しいのか・・・悩んでいる
  - ✓実習指導者に相談できていない
  - ✓本人が困りごとに気付いていない
  - ✓実習の目的や目標がずれている
- ・他の授業もあり、頻繁に実習巡回に行くことは難しい。

■生徒と実習日誌を共有したいが、  
デジタルの実習日誌は使用していない

- ・高校生には個人情報の管理が難しい。
- ・AIを使って、自分の想いや感想を書かないケースがあるのでは・・・。

■Google Classroom を活用し、実習日誌を毎日やり取りすることを始める

- ・実習日誌を提出する前に、手書きの実習日誌を写真に撮り、Google Classroom で毎日送る。
- ・実習日誌のほかに、自分で今日学んだことを「一言」記載する。
- ・実習中はスマートフォン使用を禁止しているが、施設に提出する前に写真を撮らせてもらうようにしている。

【メリット\_ 教員にとって】

- ・毎日の生徒の様子を知ることができる。
- ・生徒の悩みに気づき、必要に応じて予防的に対応できる。
- ・施設の対応を知ることができ、生徒への助言に結び付ける。

【メリット\_ 生徒にとって】

- ・「いつもつながっているという安心感」がある。
- ・生徒の気づきをほめるコメント、悩みや困っていることに助言、不安が大きい生徒をサポート、間違えていることを指摘するなどのやり取りができる。
- ・手書きを写真で送る。
  - ➔ 「文字が書けない」「文章が苦手」である生徒の記録を書く練習につながっている。

【職員・教員・生徒が一体になって実習に取り組める】

- ・生徒の記載内容を巡回時に職員とも共有している。
- ・実習先職員・教員・生徒が一体になって実習に取り組んでいるという実感がある。

# ICT活用と介護テクノロジー教育を通して『学びの質』を高める

## 事例 3

### 愛知県立古知野高等学校

#### ✧教育に活用している ICT 等

- コミュニケーションツール
- 授業支援アプリケーション
- 介護記録・音声入力アプリケーション

#### ✧教育に取り入れている介護テクノロジー

- 見守りセンサー・システム
- 介護記録・情報共有支援
- 体圧測定・歩行分析

- ◆所在地：愛知県
- ◆学校種別：福祉系高等学校
- ◆定員数：40名(1学年あたり)
- ◆専任教員：5名
- ◆設置者：愛知県



#### ICT活用と介護テクノロジー教育を支える2つの取組

##### 科学的裏付けに基づく介護

- ・学習指導要領では「福祉用具や介護ロボットを含む福祉機器に関する学習の充実」が明記されており、「意義や活用を扱うこと」と示されている。
- ・単に“知る”段階から“使いこなす”段階へ学びを深め、得られたデータを分析し、目の前の対象者の暮らしをどう良くするかを考える学びへと発展させている。
- ・歩行データ、睡眠データ、体圧分布などを多角的に読み解き、利用者の状態を根拠をもって判断できる力を育成している。

##### 課題解決型学習

- ・生徒同士がチームを組み、「認知症の方や家族が孤立しない場づくり」「子どもたちの共に生きる力の育成」「介護職の魅力が伝わらない状況の変革」「高齢者が楽しみながら健康を維持できるコンテンツ開発」といった地域の福祉課題を設定する。
- ・こうした課題を出発点に、生徒たちはPBLアドバイザー※の助言を受けながら、自らの問いを深め、解決策を“地域に寄り添う形”で検討していく。

※Project Based Learning の学習を実施する際に、生徒に助言やサポートをする。

#### 介護福祉教育におけるデジタル技術活用 -教育・授業の展開方法-

##### Microsoft Teams

- ・共同編集機能を活用し、発表資料を作成している。
- ・介護実習の個人票や作文も課題機能で作成・添削し、提出管理を効率化している。
- ・教員と生徒がアカウントを共有することで、円滑なコミュニケーションと情報共有が実現している。

##### ロイロノート・スクール

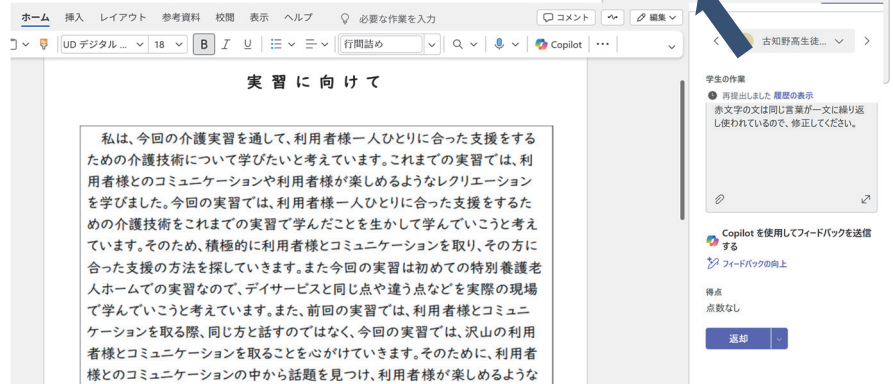
- ・授業内での意見共有や提出物の収集、発表活動を行う。
- ・写真や動画、音声など多様な形式で記録・提出が可能であり、生徒は自分の考えを視覚的に整理しやすい。
- ・提出されたカードを即時に共有・比較でき、双方向性の高い授業を実現している。

##### CAREKARTE ・ハナスト

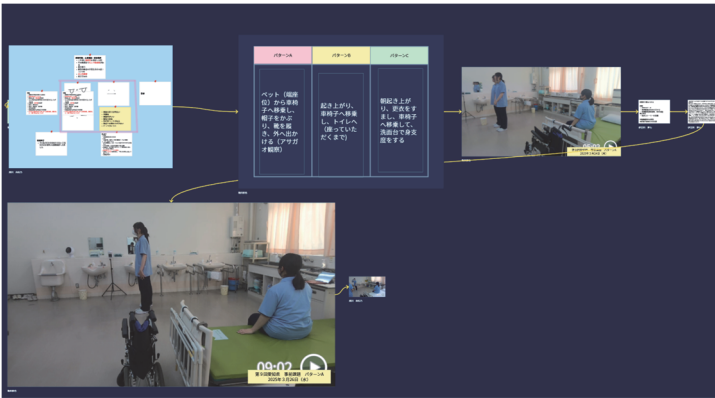
- ・令和7年9月から介護記録ソフト CAREKARTE (ケアカルテ) を授業に導入し、記録方法の習得と情報活用の力を育成している。
- ・科目「生活支援技術」では、音声入力アプリケーション「ハナスト」と連動させ、記録の練習を行う。

## Microsoft Teams の活用

- ・介護実習の個人票や作文は、提出後すぐに教員が添削コメントを返せるため、生徒は即座に修正できるようになった（右図）。
- ・生徒は自宅や放課後でも同時に発表資料を編集できるようになり、離れた場所からでも意見交換や修正が可能。
- ・発表準備では担当ごとの作業進捗が確認でき、遅れがある部分を他のメンバーが補うなど、チーム全体で完成度を高める動きが生まれた。



## ロイロノート・スクールの活用



- ・生徒は授業中に撮影した介護技術の写真や動画を即座に提出し、教員がその場で助言や修正指示を行える。
- ・意見共有では、生徒全員の考えがカードとして瞬時に一覧表示されるため、類似した意見や異なる視点を比較しながら議論を深めることができた。
- ・発表活動では、提出されたカードを組み合わせてスライド化できるため、短時間で視覚的に分かりやすい発表資料を作成できるようになった。

## CAREKARTE・ハナストの活用

- ・介護記録ソフト CAREKARTE（ケアカルテ）を授業に導入し、記録方法の習得と情報活用の力を育成している。
- ・科目「生活支援技術」では、音声入力アプリケーション「ハナスト」と連動させ、記録の練習を行う。



### ベッドセンサー

- ・利用者の呼吸、体動、睡眠状態を非接触で測定し、データとして記録できる。
- ・睡眠の質や生活リズムを分析し、必要な支援やケアの方向性を検討する演習を行う。
- ・介護実習において利用者のアセスメントに活用することを検討しており、具体的かつ根拠に基づいたケアの立案につなげる。

### 体圧測定・歩行分析

- ・体圧測定機器は、車いすに敷いて使用し、着座時の圧力分布を可視化することで、褥瘡予防や適切なクッション調整、ポジショニングの工夫を学ぶ教材として活用している。
- ・歩行分析機器は、利用者の歩幅や重心移動、バランス状態を数値化し、転倒予防や歩行介助方法の検討に加え、利用者の状態に適した福祉用具の選定にも活用している。

### CAREKARTE

- ・介護施設・事業所では記録や各種センサーにより多くの情報が日々蓄積されるが、重要なのはそれらを単に保存することではない。
- ・蓄積されたケアデータを分析・解釈し、根拠に基づいたケアの改善や的確な判断に結びつける力を養うことが、これからの介護福祉士養成教育において不可欠である。

### ベッドセンサー

- ・眠り SCAN の活用により、生徒は利用者の睡眠状態や生活リズムを客観的データとして捉え、支援内容を検討する力を養っている。
- ・授業では、取得したデータを用いてアセスメントを行い、より具体的かつ根拠に基づいた介護計画の立案につなげている。
- ・ケアデータの分析方法や活用の視点については、マイスターハイスクール※の一環として、同朋大学の先生方から年間20時間にわたって専門的な座学を実施しており、単なる機器操作にとどまらず、データの読み取りと活用を体系的に学んでいる。

※専門高校と地域産業が連携し、次世代の職業人材を育成する文部科学省の事業。

大学と連携  
(大学教員のリレー講義)



### 体圧測定・歩行分析

- ・体圧測定機器の活用により、生徒は着座時の圧力分布を視覚的に理解し、褥瘡予防の重要性や適切なクッション選定・ポジショニングの工夫を具体的に学んでいる。
- ・歩行分析機器の活用では、歩幅や重心移動、バランス状態を数値で把握することで、転倒予防や歩行介助方法の改善につなげている。
- ・分析結果を基に利用者に適した福祉用具を選定する演習を行うことで、データを根拠にした介護方法や用具選びの力を養っている。

## CAREKARTE

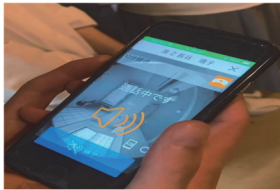
- ・ CAREKARTE (ケアカルテ) を活用する前提として、介護施設の施設長に「科学的介護」の講義を依頼している。
- ・ CAREKARTE の活用により、生徒は正確かつ簡潔に情報を記録する技能を身につけることができる。
- ・ 入力した記録を時系列で整理・比較することで、利用者の状態変化を客観的に把握し、根拠に基づいた判断を行う力が養われる。
- ・ 実習や演習で得られた記録データを共有・分析する過程を通じて、多職種連携に必要な情報伝達の方法や視点を学ぶことができる。
- ・ これらは、介護福祉士として必要不可欠な記録力・分析力・情報共有力の育成につながるものである。

## 介護施設と連携



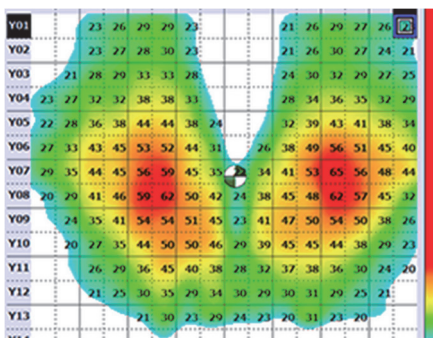
### 【生徒の感想】

#### 科学的介護や業務改善につながる視点が生まれた



- ・ ベッドセンサーでは、アラームが鳴ってから利用者さんのもとへ行くと介護者の負担が大きいので、まずはその人の特性を理解するためにセンサーを使用し、(アセスメントのために活用) そこから得た情報を解析、分析し、アラームが鳴る前に利用者さんの対応ができるようにしたい。
- ・ そのことが結果的に介護者の負担を減らすことになる。
- ・ 例えば、夜間毎回同じ時間にアラームが鳴る方がいたら、毎回なぜ起きてしまうのかを分析し、アラームが鳴る前にその方の元へ行き、事前に対応することが良いと思う。

### ■生徒の学びが、介護実習での提案に



- ・ 体圧分布の学習は3年次の介護実習でも活用されていた。
- ・ 車いすで食事をしていた利用者から「臀部が痛い」との訴えがあった場面。  
↓
- ・ 生徒は足台に足を置いたままの姿勢では臀部に圧が集中する可能性が高いと考え、「いすに移り替えて姿勢を整えた方が痛みが軽減するのではないか」と職員に提案した。

# ICTを活用した学びの提供

コミュニケーションツール・教務システム・デジタル教科書を活用した主体的学びの支援

# 事例 4

## 東北保健医療専門学校

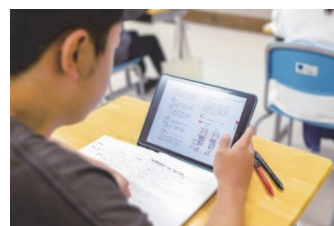
### ✿教育に活用している ICT 等

- デジタル教科書
- コミュニケーションツール
- 教務システム
- ウェブフォーム作成ツール
- タブレット
- 音声入力アプリケーション

### ✿教育に取り入れている介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- 排泄支援
- 見守りセンサー・システム
- 介護記録・情報共有支援

- ◆所在地：宮城県
- ◆学校種別：専門学校
- ◆定員数：20名(1学年あたり)
- ◆専任教員：3名
- ◆設置者：学校法人日本コンピュータ学園



### ICTを活用した学びの提供 Microsoft Teams&教務システム

・2020年4月から、Microsoft Teamsを使った学びの環境を整備

#### Microsoft Teams

シラバス  
時間割  
の共有

授業資料  
動画  
の共有

課題の提示  
と  
提出の管理

学内の  
教員間の  
チャット

学科内の教員と学生間のチャット

実習資料の  
添削、提出

授業アンケート  
→Google フォーム  
URL

学生の  
資料作成

実習中の  
連絡・相談

#### ■導入・活用のポイント

- ・導入のためのICT委員会を教員でたちあげてスタート。
- ・Microsoftのマニュアルを見ながら試行錯誤。
- ・スタート時は教員向けの研修会も実施。
- ・非常勤の先生には、無理に勧めず、やれる範囲でお願いしている。
- ・授業資料や実習資料（日誌、介護過程用紙）に関しては、学生にルールを周知・徹底。

・2024年4月から、教務システム（infoClipper）を導入し、教務管理環境を整備

#### infoClipper

出欠管理

成績管理

保護者への  
成績通知  
※今後実施

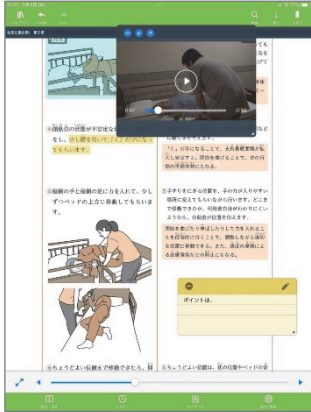
#### ■導入・活用のポイント

- ・出席を入力している、非常勤講師の授業の分は担任が入力。
- ・学生はポータルサイトから、出席率や成績を自分のスマートフォンで確認できる。

i Padを一人1台提供

～タブレットでも大丈夫？～

- ・学生にとってはパソコンより身近。
- ・学生によっては入力用にキーボードを購入して使っている（学生に任せている）。
- ・1年次は貸与、2年次は譲渡。
- ・タブレットの方がコスト的に安価。



教員にもメリット

- ・教科書がデジタル化されて、資料作成がしやすくなりました

デジタル教科書※ を採用

～デジタル教科書は便利～

- ・いつでもどこでも読むことが可能で主体的学びにつながる。
- ・ほとんどの科目の教科書を持ち運ぶことができる（紙面の資料も併用）。
- ・重くない。
- ・メモを入れることもできる。
- ・アンダーラインを引ける。
- ・目次から行きたい見出しに飛べる。
- ・検索ができる。
- ・拡大表示ができる。
- ・忘れ物が少なくなった。

※中央法規出版株式会社

■学生のメリット

- ・課題が文字で明記される。  
→留学生も確認・認識しやすい。
- ・難しい漢字を書けない留学生等も入力により記載ができる。

■課題

- ・ICTに詳しい教員がいないと進まない可能性。
- ・導入・活用を推進する教員に負担がかかる。

■教員のメリット

- ・レポート等の提出物が読みやすい。
- ・学生との修正のやり取りをしやすい。
- ・レポートの提出管理などについて、業務負担が軽減。
- ・導入時は初期入力が大変だが、次年度以降は作業負担が総じて軽減。

学生に対しては使用のルールを指導 → 個人情報保護の教育につなげる

■共有資料

- ・外部の人にコピーして渡したり、ファイル譲渡はしない。

■プリントする場合

- ・自宅のプリンターでプリント。
- ・コンビニではプリントしない。

■介護実習におけるやりとり

- ・実習資料の入力は自宅か実習先のみ。電車やバスでの入力はしない。
- ・利用者のお名前、出身県はイニシャルではなくアルファベット。

■学生のメリット

- ・自分の出席状況や成績を主体的に確認できる。

■教員のメリット

- ・全体を俯瞰して管理できる。
- ・間違いが少なくなることで効率化が図られる。
- ・ペーパーレス化。

## 各科目におけるICT活用と介護テクノロジー教育

### 生活支援技術（1年前期後期）

#### 【介護テクノロジー教育】

- ・企業のショールームに行き、見守りシステム、排泄や排尿支援の介護テクノロジーを見学（眠りSCAN等）。
- ・企業に機器を持ち込んでいただき、授業の中で体験（ROBOHELPER SASUKE）。
- ・学校で購入して体験（Hug）。

#### 【工夫】

- ・自分で見て、触って、使う体験型の授業。
- ・生活とは何かということから始まり、生活の流れの中に、介護テクノロジーを組み込んでいく授業展開を大切にしている。

#### 【課題】

- ・企業の継続的な協力が難しい、調整に時間がかかる。
- ・レンタルや購入ができず、見学で終わることがある。

### コミュニケーション技術（2年後期）

#### 【介護テクノロジー教育】

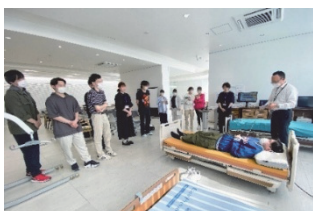
- ・企業の協力を得て、介護ICTの講義をしていただき、音声入力アプリケーション「ハナスト」を体験。

#### 【工夫】

- ・介護実習先の職員にも講義に参加を促し、介護テクノロジーの紹介と体験をしていただいた。
- ・学生がどのようなことを学んでいるかを知っていただく機会につなげ、学生と施設職員が学びを共有した。

#### 【課題】

- ・企業の継続的協力が難しく、調整に時間がかかる。
- ・協力が得られない場合は、ウェブサイトから様々なソフトを紹介するにとどまる。



手書きの字の上手下手に左右されずに、介護過程の内容を評価できると実習指導者にも好評

### 介護実習（1年～2年）

#### 【ICT活用】

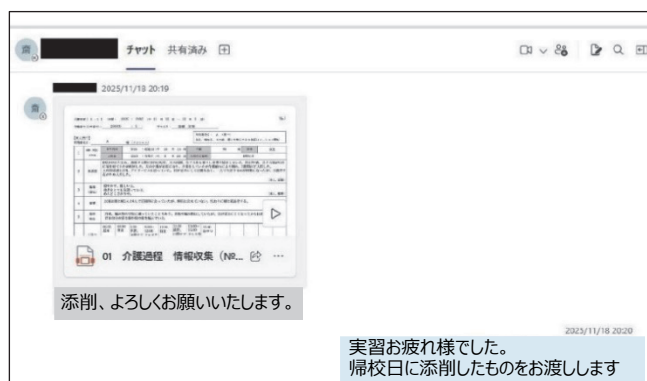
- ・Microsoft Teams を活用して、介護実習の添削や連絡をサポート(下図)。
- ①実習日誌添削、②介護過程用紙の添削
- ③教員と学生間の報告、連絡、相談
- ・介護実習の実習日誌(右図)は、iPad で入力し自宅のプリンターで印刷し翌朝提出。

#### 【工夫】

- ・カンファレンス前日を帰校日に設定し、介護過程用紙は学校で印刷し、学生に渡す。施設にはメール送信。
- ・使用のルール(前ページ掲載)の指導を徹底。

#### 【効果】

- ・介護実習の実習日誌(右図)、介護過程用紙作成をデジタル化することにより、体験学習に重点を置くことができる。
- ・手書きの上手下手に左右されず、学生・教員・実習先のストレスが少ない。



実習お疲れ様でした。  
帰校日に添削したものをお渡します

### 介護総合演習（1年～2年）

#### 【ICT活用】

- ・Microsoft Teams の課題機能を使用し、実習にかかる全ての資料提出を管理。
- ・介護実習後に行う「実習報告会」の資料共有及び発表に関する評価アンケートの実施(右図)。



# 産学連携を軸とした 介護テクノロジー教育の取組

～産学連携でマネジメントをする人材を育てる～

# 事例 5

## 東京福祉専門学校

### ✳️教育に活用している ICT 等

- コミュニケーションツール
- 多言語対応の双方向翻訳機

### ✳️教育に取り入れている 介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- 排泄支援
- 見守りセンサー・システム
- コミュニケーションロボット
- 介護記録・情報共有支援
- 業務支援
- 機能訓練支援

- ◆所在地：東京都
- ◆学校種別：専門学校
- ◆定員数：80名(1学年あたり)
- ◆専任教員：8名
- ◆設置者：学校法人滋慶学園



### 介護テクノロジーを教育に取り込んだ背景と科目「介護ICT」の創設まで

- ・保護者の方が「介護の仕事は大変だ」と子どもの入学を止めるケースがあった。
- ・介護業界においてICTの活用がはじまり、介護施設・事業所に変化が見え始めていた。

令和元年度  
介護福祉士養成施設の定員充足率

**48.5%\***

※公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会ウェブサイトより

- ・社会が投影する「介護＝3K」というイメージを払拭したい。
- ・介護業界に希望が持てれば、介護を学ぶことを選択するのではないかな。

法人の後押しもあり 2017 年から介護テクノロジーの教育がスタートし、授業の形態と内容は徐々に変化・・・

2017～2018 年 (オリジナル科目)

#### 科目「自立支援介護論」

- ・授業に介護テクノロジーを取り込む
- ・年間のうち7コマ程度で展開

2019～2022 年  
(オリジナル科目)

#### 介護みらい プログラム

2023 年～ (オリジナル科目)

#### 科目「介護ICT」

- ・2年間計120時間、8単位
- ・通年の科目として展開

**企業と連携して授業を展開**

### 人材不足・持続的な介護の実現は「業界共通の課題」

東京福祉専門学校：ICT介護（生産性向上）に対応できる次世代の介護福祉士の育成を目指す。

コニカミノルタ株式会社：介護現場のワークフロー変革を目指す。



2年間の科目全体の到達目標（最終ゴール）

🎯 デジタル中核人材×介護福祉士としての到達目標（2年後）

1. 介護福祉士としての専門性を、ICT・介護ロボットで拡張できる
  - ・ ケアの質・安全・自立支援と、テクノロジーの関係を説明できる。
  - ・ 「楽をするため」ではなく「ケアを良くするため」のICT活用が語れる。
2. 現場の業務を“構造的に”見て、改善点を見つけられる
  - ・ 業務を分解し、「人がやるべき仕事／テクノロジーで代替できる仕事」を区別できる。
  - ・ 生産性向上＝人減らしではない、と論理的に説明できる。
3. ICT・介護ロボットを“使う側”ではなく“選び・つなぎ・回す側”になれる
  - ・ 見守り、記録、インカム、ナースコール、シフト管理アプリ、連携ツールの役割を理解している。
  - ・ ツール同士の連携イメージを描ける（情報がどう流れるか）。
4. 小さな改善プロジェクトを現場で回せる
  - ・ 課題設定 → 試行 → 振り返り → 改善 のサイクルを体験している。
  - ・ チームでの合意形成・説明ができる。
5. 「介護×テクノロジー」を語れる人材として、職場で一目置かれる
  - ・ 新人でも「それ、ICTでこう変えられますよ」と言える。
  - ・ デジタルが苦手な職員に橋渡しができる。

※東京福祉専門学校 × 善光総合研究所『介護ICT』について

各期ごとのテーマと到達目標

■1年 前期

【テーマ】介護施設・事業所で使われるICT・介護ロボットに触れ、基礎的な役割を理解する。

■1年 後期

【テーマ】介護業務を構造的に捉え、ICTが活きる場面を理解する。

■2年 前期

【テーマ】ICT介護ロボットを組み合わせ、現場で使いこなす視点を身につける。

■2年 後期

【テーマ】デジタル中核人材の入口として、現場を動かす介護福祉士になる。

\*とにかく触れてみる → なぜ？を考える  
\*国の制度との連動



## 2年間に学生がふれるICT・介護テクノロジーの例

HAL  
(移乗支援)

HUG  
(移動支援)

Helppad  
(排泄支援)

DFree  
(排泄支援)

LOVOT  
(コミュニケーションロボット)

Palro  
(コミュニケーションロボット)

HitomeQ  
ケアサポート  
(見守りセンサー)

眠りSCAN  
(見守りセンサー)

SCOP  
(業務支援・介護記録・音声入力)

CAREKARTE  
・ハナスト  
(業務支援・介護記録・音声入力)

ケアコラボ  
(介護記録)

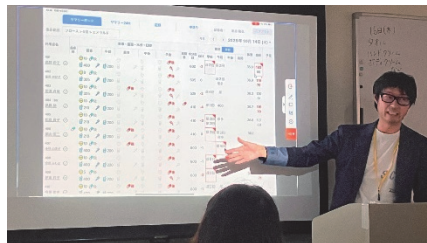
らくしふ  
(介護業務支援・シフト自動作成)

モフトレ  
(機能訓練支援)

### 介護テクノロジー教育1

社会福祉法人善光会 による授業 ～介護施設・事業所での活用をリアルに体験～

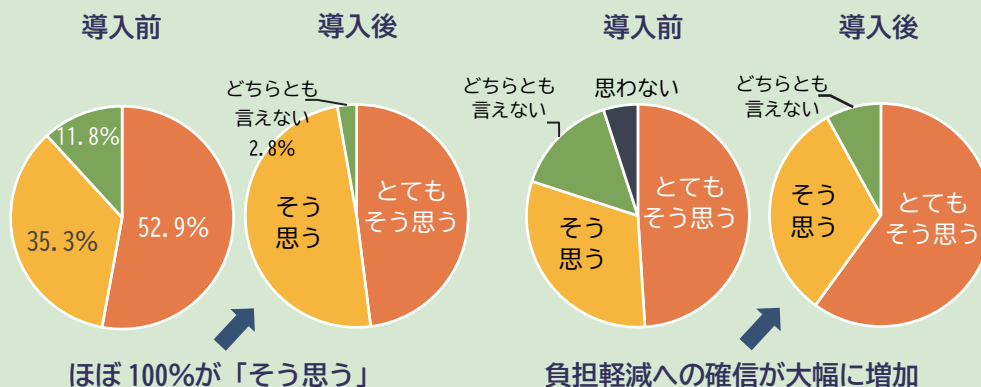
- ・介護施設・事業所で活用されている介護テクノロジーを授業で展開する。
- ・現場で実際に活用されている介護テクノロジーに触れ、使ってみる。
- ・活用イメージがわき、興味が刺激される → 就職希望へもつながる。
- ・学んだことを活かせる職場への就職が叶う。



### ■介護テクノロジーを学んだ学生の変化

#### 定量的成果①：懐疑から確信へ

利用者の生活を良くするのに役立つか？ 介護職員の負担を減らすと思うか？



定量的成果②：  
95%が使いたいと回答

就職したら  
ロボットを使いたいか？

95%

※修了時アンケート結果


「知らない」から不安になる。  
「知る」ことで、それは強力な武器になる。

- ・授業に取り入れている介護テクノロジーについては、つながりがある企業等に可能な限り来校していただき、活用の視点、使用方法、メリットや課題等を講義していただいている。

「HitomeQ ケアサポート」コニカミノルタ株式会社による授業プログラム

れいひななねんど こうぎよてい

**R7年度講義予定**



こうぎ ぜんごかい

- ・講義は、全5回になります。

こうぎ まいかい さがく こうせい

- ・講義は毎回、座学とグループワークの構成です。

さいしゅうかい とくべつ ようい たの

- ・最終回は、特別プログラムを用意しています。（お楽しみに！）

	5/8 科学的介護とは	7/17 HitomeQの体験	7/24 HitomeQで出来る事 (データ収集について)	10/16 デジタル介護過程 (データを活用した介護)	10/23 デジタル介護過程 (データを活用した介護)
座学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・厚労省情報活用 (科学的介護、LIFE、PDCAサイクルなど)</li> <li>・タイムスタディ (業務分析、定量評価)</li> <li>・パッケージ導入モデル (課題の可視化)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・HitomeQとは・・・</li> <li>・コンセプト動画</li> <li>・紙資料</li> <li>・ユーザー活用事例動画</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・HitomeQとは (おさらい)</li> <li>・原理説明</li> <li>・各種データ紹介</li> <li>・睡眠</li> <li>・介護情報</li> <li>・行動パターン/エリア など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科学的介護 (おさらい)</li> <li>・データの紹介 (おさらい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終回 (グループワーク) 映像から事故報告書を書く</li> <li>①事実を把握する</li> <li>②原因を分析する</li> <li>③再発防止策を決める</li> <li>④実行計画を立てる</li> <li>⑤進捗を確認する</li> </ul>
時間	30分	30分	30分	30分	
グループワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペルソナ (高齢者) を読み取り、9分野13項目から介護テックを選ぶ</li> <li>①なぜ選び、②どのように使うか?</li> <li>・業務課題の整理と七つの打ち手から業務課題を構造化 (可視化) する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実演</li> <li>・センサ検知/スマホ通知</li> <li>・ナースコール</li> <li>・映像見て声かけ</li> <li>・転倒映像 (ドラレコ)</li> <li>・ケアループ紹介</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲスト講演</li> <li>・HitomeQユーザー活用談義</li> <li>・現場職員が語るこれからの介護</li> <li>・ペルソナを参考にHitomeQの通知設定を考える</li> <li>・ペルソナ+通知情報から訪室順を考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・データを読み解き、あなたならどのような介護をしますか?</li> <li>&lt;データ事例&gt;</li> <li>・フロア別ナースコール数</li> <li>・睡眠状況と介護記録など</li> </ul>	
時間	60分	60分	20分×3人=60分	30分×2種=60分	90分

© KONICA MINOLTA 0

コニカミノルタ株式会社による5回の授業

- ・前提となる「科学的介護」の理解を皮切りに、「HitomeQケアサポート」の体験やデータの活用、デジタル介護過程<sup>®</sup>などを講義。
- ・実際に介護事業所にて導入定着支援を担当する社員による講義(実体験に基づく活きた講義)。
- ・近年、介護現場の業務改善が着目されている。介護福祉士を目指す学生に業界動向を踏まえ、介護テクノロジー活用による業務改善を講義。

コニカミノルタ株式会社さんからのコメント

弊社は、「お客様の見たい」を叶える企業として、2016年に介護業務を見える化するため、「HitomeQケアサポート」を上市し、今日まで多くの介護事業所にてご活用いただいています。

映像技術やICT機器を活用することにより、介護業務を見える化することができてい

ます。介護現場での介護テクノロジー活用は、当たり前になりつつあります。一方、介護人材不足は年々深刻化しており、介護福祉士養成施設での介護テクノロジー教育は重要さを増すなかで、難しさを感じています。

弊社は、介護現場の映像やデータの視点から、介護福祉士を目指す方々と一緒に介護の未来をつくっていきたくと考えています。

# 地域の介護テクノロジー推進機関・ 介護施設との連携による教育

# 事例 6

## 富山短期大学

### ✳️教育に活用している ICT 等

- 学習管理システム
- 動画

### ✳️教育に取り入れている 介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- 排泄支援
- 見守りセンサー・システム
- コミュニケーションロボット
- 入浴支援
- 介護記録・情報共有支援
- 業務支援
- 機能訓練支援
- 食事・栄養管理支援

- ◆所在地：富山県
- ◆学校種別：短期大学
- ◆定員数：20名（1学年あたり）
- ◆専任教員：7名
- ◆設置者：学校法人富山国際学園



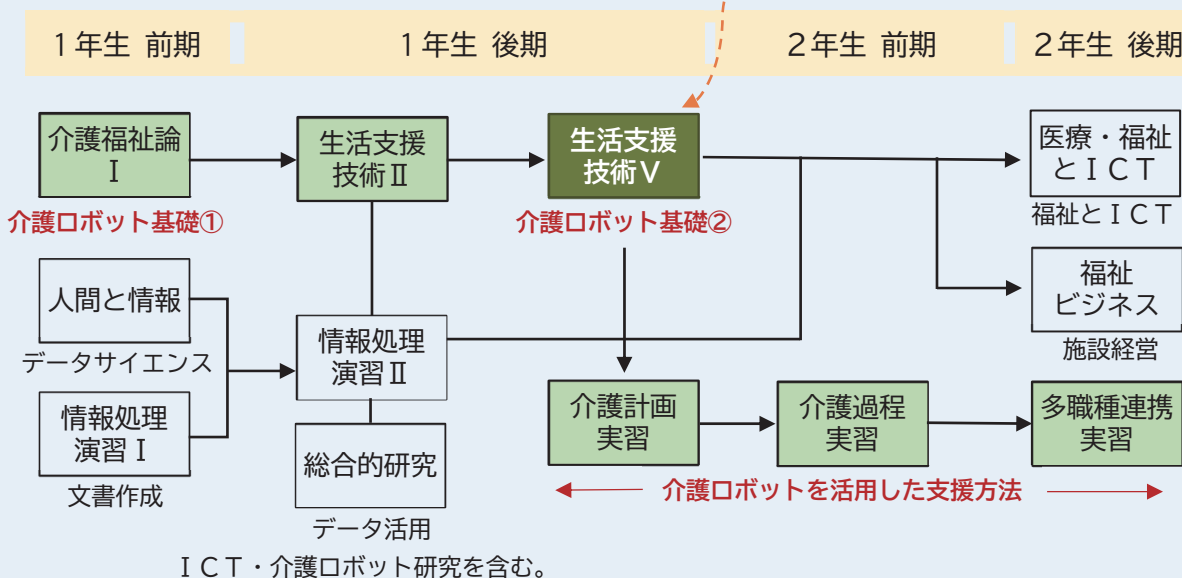
### 介護テクノロジーを教育に取り込んだ背景とねらい

- ・学科の目指す人物像「人々の健康と幸せ well-being を支える人材の育成」が出発点。
- ・介護ロボットや ICT に触れ、価値を理解し、仕事で推進して行ける人材を育てる。

### 【カリキュラム構成のポイント】

- ・（下図参照）1年生で「**介護ロボットの基礎①②**」を学び、1年生後期から始まる介護実習で「**介護ロボットを活用した支援方法**」を学ぶ。
- ・**生活支援技術Ⅴ**（次ページ参照）において、地域の機関と連携した介護テクノロジーの学びを展開。

### 介護テクノロジーに関わるカリキュラム構成(全体)



生活支援技術V（1年次）

- 授業目標
  - ・介護ロボット・ICTを活用できる基礎的能力を習得する。
  - ・介護ロボット・ICT活用の重要性を利用者・介護職員・組織の視点から理解する。
- 学びの柱
  - ①介護ロボットについて最新の国の施策や最先端の介護ロボットを知る。
  - ②複数の介護ロボット・ICT機器の使用方法を習得する。
  - ③介護ロボット・ICT機器の活用による効果を理解する。
  - ④介護ロボット・ICT機器の活用による利用者の思いを理解する。
  - ⑤介護ロボット・ICT機器の活用による組織のあり方を理解する。

■授業プログラム

回	授業プログラム	
第1～6回	【学 内】介護ロボット・ICTの基礎知識と操作体験	
第7～8回	【学外授業】利用者のQOLと自立支援に向けた支援	とやま介護テクノロジー普及・推進センター
第9～12回	【学 内】リスクマネジメントと組織導入の課題	
第13～14回	【学外授業】介護ロボット・ICTの実践的活用	ささづ苑かすが
第15回	【学 内】まとめ	

■学外授業 実施までの流れ：早めの準備(日程調整)と丁寧な打合せがポイント

【7か月前】企画・手配

介護テクノロジー推進センター、介護施設との打合せ開始。  
目的や内容の説明、日時・時間割の調整、移動のためのバスの手配。

【2か月前】事前打ち合わせ

機器の選定と時間配分の決定、学生人数と履修状況の共有。

【実施・振り返り】

講師同行での実施（約3時間）、レポート・アンケート・意見交換。

介護テクノロジーに関する連携先を探すポイント

情報の収集先

- ・実習中に、見学や情報交換。
- ・プラットフォーム事業の拠点に相談。
- ・介護テクノロジー開発企業との情報交換。
- ・教員間の意見交換。
- ・見本市（国際福祉機器展、CareTEX）での情報交換。

連携のポイント

- ・多数のテクノロジー機器が完備されているか。
- ・導入実績・効果があるか。
- ・実習や卒業生など、「つながり」があるか。

■とやま介護テクノロジー普及・推進センターの概要

【設置】

令和5年4月  
富山県

【目的】

介護ロボットやICTの  
活用を支援する拠点

【主な機能】

介護テクノロジーの展示、介護事業所・開発  
企業・一般県民からの相談対応、体験講座・  
研修の実施、伴走支援等

■学びのテーマ：「触れて、見て、感じる」多角的な学び。

■授業の目的：複数のテクノロジー機器を知り、疑似体験を通じて利用者の思いを知る。

■工夫点：

- ・最新かつ介護施設導入率の高い機器を厳選。
- ・小グループ編成(4～5人)で十分な体験時間を確保し、率直な意見交換を促進。

■効果：

実体験を通じた深い学び

「する側」だけでなく「される側」を体験し  
操作の難しさや利用者の思いに気付く

メリットの再認識

負担軽減だけでなく、利用者の安全確保や  
自立支援への貢献を実感

導入・運用上のハードル

費用、設置スペース、準備時間、  
プライバシー配慮、音声入力の確認作業など  
リアルなデメリットを認知

現場に合わせた選定

利用者の状態と介護者の操作性を両立する、  
ニーズにフィットした機器選び  
の重要性を理解

地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携がもたらす「Win-Win-Win」の連鎖



学生  
(次世代のプロ)

- ・現場のリアルな効果と課題の理解。
- ・就業意欲の向上とキャリアパスの拡大(就職先選考の条件へ)。



介護施設  
(現場の実践者)

- ・介護の魅力発信と職員採用への直結。
- ・見学受け入れによる職員の誇り、モチベーションアップと育成効果。



推進機関・  
地域社会

- ・地域全体におけるテクノロジーの普及。
- ・介護の質の向上と離職防止。

■ ささづ苑かすが（社会福祉法人おおさわの福祉会）が導入している介護テクノロジー

【移乗支援】	【記録・音声】	【見守り】	【業務効率化】	【離床アシスト】
HUG スカイリフト 床走行式リフト	CAREKARTE ハナスト	眠りSCAN	DocuWorks	リショーン Plus

■ 学びのテーマ：「現場で生きる」マネジメントの学び。

■ 授業の目的：

- ・これまで触れてきたものが実際はどう使われているか。
- ・どのような効果があったか。
- ・マネジメントの観点から、どのように普及、定着しているか。



■ 効果：

「効率化」の真の目的を理解

単に楽をすることではない、  
生み出された時間を「利用者と向き合う時間」  
や「安全・安心の確保」に充てるためのもの

テクノロジーと人の温かさの融合が  
質の高い介護につながる

機械に全てを任せるのではない、「人の判断と  
コミュニケーション」が加わって初めて  
質の高い介護が成立

丁寧なプロセスと環境づくりが  
活用の定着につながる

職員の苦手意識をなくし定着させるため、  
勉強会やスモールスタートとして導入する  
「マネジメントの視点」が重要



連携による教育を進めるためのポイント

■ 連携先との日程調整

- ・学校のカリキュラムと推進機関や介護施設とのスケジュールを合わせるために、早めの準備が必要。

■ 移動手段や予算の確保

- ・遠方に行く場合の移動手段の確保、予算やコストとの兼ね合い。

■ 授業の時間配分

- ・授業プログラムの流れと連携先での体験や見学のタイミングを合わせる。



# ICTを使った介護実習の効果的展開及び 多様な機器を取り入れた介護テクノロジー教育

# 事例 7 仙台大学

## ✳️教育に活用している ICT 等

- 学習管理アプリケーション
- 実習学習支援システム
- 動画(自作等)
- VR

## ✳️教育に取り入れている 介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- コミュニケーションロボット
- 機能訓練支援

- ◆所在地：宮城県
- ◆学校種別：四年制大学
- ◆定員数：80名(1学年あたり)
- ◆専任教員：9名
- ◆設置者：学校法人朴沢学園



## 全ての科目で Google Classroom を活用

### 活用例(抜粋)

- ・資料の共有(配布忘れがない)
- ・動画の共有
- ・授業予定や予習内容等の案内
- ・授業の振り返りや課題の提示と提出管理
- ・学生へのフィードバック
- ・欠席をした学生への個別対応(欠席分の動画や資料を共有)
- ・Meetを使ったやりとり(欠席連絡等)
- ・Googleフォームの活用
  - 小テスト
  - 国家試験対策模擬テスト 等

### アセスメントシートの作成 ~介護過程~

#### ■アセスメントシートの作成

- ・教員がスプレッドシートでフォーマットを作成
- ↓
- ・Googleドキュメントに保存
- ↓
- ・配信し、学生は授業の中で入力
- ↓
- ・教員は個々に確認をし、学生とやり取り

### 教員のメリット

- ・ペーパーレス化が進む。
- ・学生とタイムリーなやりとりができる。
- ・データを蓄積して活用できる。
- ・日々の課題を通して、学生の学びの変化を把握できる(学生の理解につながる)。
- ・複数の教員が協働で作業できる。  
→複数の教員が担当するオムニバスの授業などにおいて効果的。

### 学生のメリット

- ・複数の学生で協働作業ができる。
- ・資料等が共有でき、繰り返しの学びができる。 等

### 課題

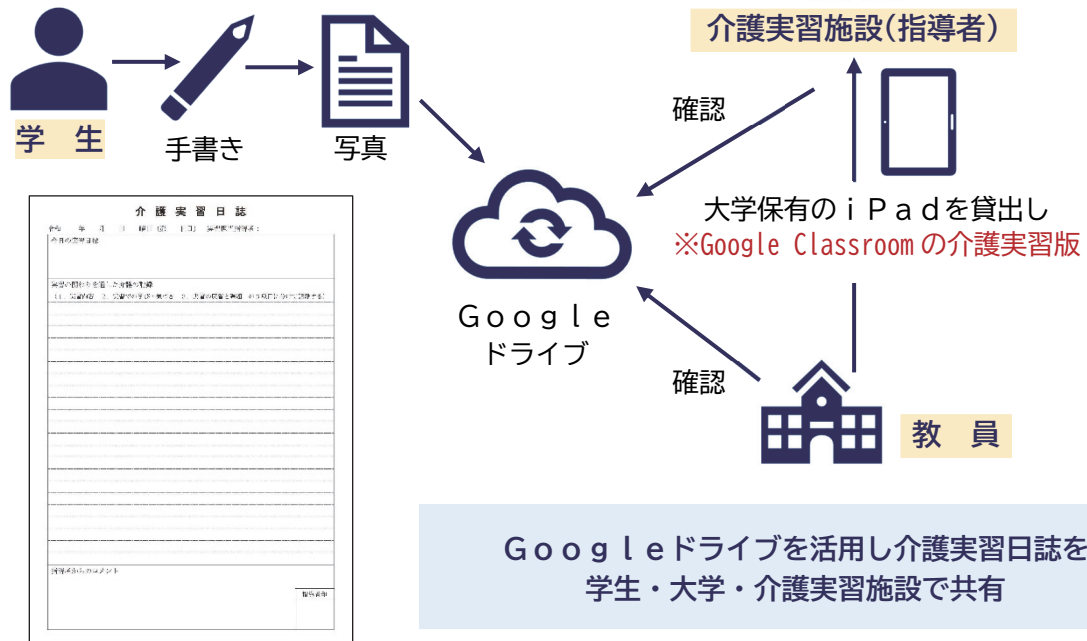
- ・連絡や情報の多さに対応できない学生がいる。 → 教員側の工夫が必要。
- ・コピー&ペーストやAI等の活用をして、自分の言葉で書かない学生がいる。 等

### ●学習機会を保障するために

- ・部活動の大会参加、他免許の実習参加、体調不良等により、欠席する学生がいる。
- ・「学生の学習する機会を保障する」ために実施している。

## Googleドライブを使った介護実習の展開

学生は手書きの実習日誌を  
写真にとってGoogleドライブにアップロード（毎日）



### Googleドライブで介護実習日誌の写真を共有する効果・メリット

学生・大学・実習施設  
がタイムリーに  
情報を共有できる

巡回指導時に  
学生の悩みや課題等  
に対応できる

実習の状況を  
確認できる

手書きは「思考する」  
ことにつながる

手書きを基本とするため  
コピー＆ペーストが  
できない

学生・実習施設ともに  
複雑な操作が不要  
（ストレスフリー）

写真に撮られた  
実習日誌の文字の  
様子から学生の心身の  
調子わかる

実習施設内でも  
情報共有ができる  
（指導者・フロア担当）

一緒に学生を育てている  
実感があるという  
実習施設の安心感



今後は、蓄積データの活用を検討していきたい

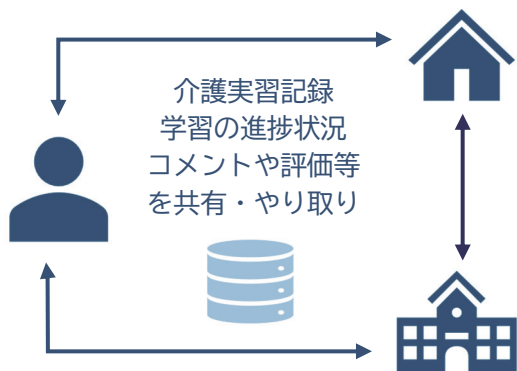
#### 【課題】

- ・情報管理の徹底。
- ・ドライブでは共有できない情報がある。
- ・双方向のやり取りができない。
- ・パソコン等ICTデバイス使用の経験につながらない。

実習学習支援システム※  
の活用へシフト

■導入の背景

- ・介護施設・事業所でICTが活用されるようになってきている。  
→ 学生もパソコン等を使えるようになってほしい。
- ・写真の共有はコメントや双方向のやり取り等ができない。



※富士フィルム株式会社

■介護実習用にシステムをカスタマイズ

- ・介護実習がどのように、どこまで進んでいるかを学生・教員・介護実習施設（指導者）が共有できる仕組みにしたい。
- ・例えば、移乗や移動について、学生は「見学をしたのか」「実際に指導者のもとで実施したのか」など、学習の進捗状況や成果を可視化して見られるシステムなるようにオーダーをしている。

■ICTの活用で生じる課題を乗り越えるために

- ・コピー＆ペーストをする、自分で考える・自分でやるということをしなくなる懸念。  
→ 授業や介護実習の中で、ディスカッションやフィードバックをする機会を意図的につくり、気持ちを表現する、対話をする、気付きの機会をつくる、自ら情報を整理する等を繰り返す。
- 思考力を磨く問いかけ、仕掛けを授業の中に入れていく必要がある。

介護テクノロジー教育で使用する機器は「購入やレンタル」で

【教育に取り入れている機器】

■購入

マッスルスーツ、Hug（移乗支援）、歩行アシスト機器（移動支援）、モフリン、ネコ型ロボット、赤ちゃん型ロボット（コミュニケーションロボット）、非接触型モーションセンサートレーニング「TANO」（機能訓練支援）

※教育だけでなく研究にも活用する機器類は、学内で協議の上、購入する。

■レンタル

ROBOHELPER SASUKE、移乗です（移乗支援）、VR（認知症体験）、WHILL Model C2（移動支援）、curara（機能訓練支援）、PALRO、NAO（コミュニケーションロボット）

※バージョンアップする機器、購入コストの高い機器類はレンタルで対応している。



### 生活支援技術の授業において 多様な機器に触れる・体験する

- ・生活支援技術の授業の中で、購入・レンタルした機器を用いて「触れる・使用する・体験する機会」をつくっている。

### 常に新しい情報を収集

- ・「国際福祉機器展」「CareTEX」への参加を活用し、企業の方々と名刺交換をしてつながって情報を得る。
- ・養成施設等の教員のネットワーク、学会、研修等を通して新しい情報を収集する。

### 外部から講師を招いて

- ・企業等を招いて、介護テクノロジーに関する講話をお願いすることもある。

### 介護テクノロジーありきにならないために

- ・アセスメントをした結果、より良い介護をするための一つの引き出しとして、介護ロボットを考えてほしい。
- ・介護の原理原則を理解した後に、「介護テクノロジー」「介護ロボット」の教育をする授業構成としている。



## 介護テクノロジー教育を通して見える効果と課題

### 見える効果

- ・面白い、楽しいという学生の反応がある。
- ・介護テクノロジーに強い関心を持つ学生がいる。
- ・学生にとっては、介護のイメージアップにつながっている。
- ・介護テクノロジーを通して、利用者の理解、尊厳を考える機会が生まれる。  
→「どんな介護テクノロジーを入れれば、利用者の生活がより豊かになるんだろう」という教員の問いかけを通して、利用者の理解、尊厳を考える機会ができる。

認知症VR → 認知症の方が見ている世界を体験



### さまざまな課題

- ・教育にマッチした機器を、適切な時期に使えるかが確約できない。
- ・レンタルや購入費用の確保。  
→無償のレンタルが少なく、購入は高額。
- ・レンタル機器を探すことが教員の負担になる。
- ・機器はバージョンアップしていく。  
→教員はタイムリーな情報収集が難しい。
- ・仕様説明動画付きのカタログなどがあると便利で安心。
- ・教員が介護テクノロジーを教育するためには「教員向けのトレーニングツール」の導入と活用が必要。
- ・地方の学校であるため、機器展等が近くで開催されないことがない。
- ・複数の養成施設等や介護施設等で、協働して取り組める仕組みがほしい。
- ・介護テクノロジーの教育について、養成施設等によって教育内容等に違いがある。

✿教育に活用している ICT 等

- 学習管理システム
- ウェブ会議ツール
- 動画
- 音声入力アプリケーション

✿教育に取り入れている  
介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- 排泄支援
- 見守りセンサー・システム
- 入浴支援
- 介護記録・情報共有支援
- 機能訓練支援
- インカム等の機器

- ◆所在地：大阪府
- ◆学校種別：四年制大学
- ◆定員数：20名(1学年あたり)
- ◆専任教員：3名
- ◆設置者：学校法人桃山学院



リアルな介護現場にふれる ～Zoomを活用して高齢者施設をライブ中継～

介護の基本（1年次）

- ・有料老人ホームの職員に、介護施設について講義をしていただく。
- ・講義の中で現場と結んでライブ中継（15～20分程度）。

Zoomの機能を使用して、施設内の様子を案内

職員が居室、屋内の様子などを説明

利用者が参加しているレクリエーションの様子

利用者へのインタビュー

職員へのインタビュー 等



利用者や現場からの学びを  
出発点にしたい

- ・高齢者や施設への偏見や固定的な見方をもっている学生の新たな気付きの機会。
- ・1年生でリアルな介護現場にふれ、介護の基本的な見方や考え方を知る。

リアルな介護現場を知る

- ・高齢者施設を知らない学生が介護現場を知る機会をつくる。

【学生の感想】

- ・施設の雰囲気がよくわかった。
- ・想像していたよりも活気がある。
- ・利用者さんの日々の過ごし方や気持ちを感じることができた。
- ・職員さんの仕事の様子を知る機会となった。

【留意点】・施設と授業の目的を共有する。

- ・施設の雰囲気だけではなく、利用者の様子や気持ちがわかる内容を入れる。
- ・介護施設・事業所を知らない学生も多いので、解説を途中や終了後に入れて理解を促す。
- ・利用者等のプライバシーに留意。

【課題】・機材準備を含めて、施設側に負担がかかる。

## 人間関係とコミュニケーション（1年次）



- ・1年生の秋学期に開講、介護福祉士国家試験を受験しない学生も受講している。
- ・大学生活に慣れてきた学生が、学習支援システム等を活用して主体的に授業に参加できるように意識。
- ・グループワークなどを行い、学生同士、学生と教員における“コミュニケーション”を大切にする授業展開。

### ■活用している学習支援システムは WebClass

#### 【共有】

- ・1年間の学習内容
- ・単位の取得条件
- ・各人の出欠状況
- ・教材・資料
- ・学生自身が課題の評価を確認 等

メールを見ない学生がいるため  
学習支援システムによる連絡が効果的  
学生が使えるようにサポートする  
ことが大切

#### 【管理】

- ・課題の提出
- ・課題の採点（教員） 等

#### 【学生とのやりとり（連絡）】

- ・講義に関する連絡
- ・欠席の連絡
- ・課題の提示、提出の遅延連絡 等

## 自律を促す取組

### ■課題提出の習慣化

～毎回、授業の終わりに提出～

#### ① 調べる、相談する行動を促す

- ・パソコン、スマートフォン、AI等、何を使って調べてもよい、学生同士で相談してもよいとアドバイス。
- ・課題のテーマを「自分」に関することに設定し、AIの活用やコピー&ペーストでは回答できないように工夫。

#### ② LMSを活用する環境をつくる

- ・LMSで提示したワードの課題に記載し、PDFにしてLMSで提出が原則。
- ・手書き希望の学生もいるので紙でも配布。
- ・手書きの学生は、手書きを写真に撮り、PDFにしてLMSで提出。

#### ③ 課題は全てに評価の点数をつけLMSで共有

- ・自分がどれくらい理解できているのかを評価から知ることができる。

## LMSを活用するにあたっての配慮

### ■動画の情報量が多すぎて・・・という学生には

- ・情報量が多すぎて不安になってしまう学生に、繰り返して観ることができる環境をつくる。
- ・サイズが大きい動画はLMSに上げられないため、GoogleドライブにあげてリンクをLMSで知らせる。

### ■情報のバリアフリー化を図る

スクリーンが見えない  
小さい字が見えにくい



- ・同じ資料を3つの方法で提供し、自分にあった方法で見ることができるように配慮。
  - ✓紙面で配布
  - ✓スクリーンに投影
  - ✓自分のデバイスでLMSにあがっている資料を見る

生活支援技術Ⅲ（２年次）

授業の概要

- ・「生活支援技術Ⅲ」の計30回のうち、後半の14回で介護テクノロジーに関する集中授業を展開。
- ・非常勤講師として、社会福祉法人の法人本部本部長に依頼。
- ・介護施設及び事業者から、テクノロジーや機器の協力を得て、大学での講義や体験に活用する。
- ・1日2回（90分×2）をつなげ、計7日を使い授業。  
前半→スライドを使った講義、後半→実技や体験で展開
- ・最後の13～14回目：2人1組となり、テーマを提示してプレゼンテーション。

■①介護について改めて考えてみる

1～2回目

- ・介護を必要とする人は高齢者ばかりではない。
- ・障害も含め、介護は様々な人が必要としていることを再度確認し、「介護」について一度“考える”ことを出発点としている。
- ・介護福祉士には様々な活躍の場があることも知ってほしい。

【実技・体験・紹介している機器】

- ・モーションセンサーを利用した福祉・ゲーミフィケーションテクノロジー  
(TANOTECH 株式会社)
- ・介護実習室内の吊り下げ式電動リフトやスライディングボード、骨格模型

■②介護ロボットやICTについて（全体論）

3～4回目

- ・介護テクノロジーの9分野、種類などに関する知識を習得する。

【実技・体験・紹介している機器】

- ・モーションセンサーを利用した福祉・ゲーミフィケーションテクノロジー  
(TANOTECH 株式会社)



■教育の効果

～13・14回目のプレゼンテーション発表より～

- ・学生が介護に対するポジティブなイメージを持つようになった。
- ・これまで身近ではなかった介護テクノロジーについて、学生はその可能性を知ったり、活用に対する視野の広がりを感じている。

■課題

- ・介護福祉士養成課程で使用するテキストでは、介護テクノロジー等に関する内容にあまり触れられていない。
- ・一方で、制度や政策、機器は日々進化しており、介護テクノロジー教育の方向性（どこまで・どのように教育するか）の明示が必要ではないか。

### ■③ノーリフトケアについて

5～6回目

- ・生産性向上や業務効率化など、介護をする側の効率化に目を向けてしまいがちであるため、あえて「ノーリフトケア」を学ぶ機会をつくる。
- ・介護テクノロジーを使えば何でも解決するという考えにならないための学び。
- ・介護テクノロジーを使わなくても、自立を妨げず、負担や不安を取り除いていく方法があることを知る。

#### 【実技・体験・紹介している機器】

- ・装着型サイボーグ HAL 腰タイプ 介護・自立支援用 (CYBERDYNE 株式会社)
- ・モーリフト レイザープロ (パシフィックサプライ株式会社)
- ・介護実習室内の吊り下げ式電動リフトやスライディングボード、骨格模型

### ■④入浴支援：新しい入浴方法や機器について

7～8回目

- ・排泄や入浴のケアは大変だ・しんどいというイメージがあり、関心が高い。
- ・排泄は大学において講義・実技・体験が難しいため、入浴に焦点をあてている。

#### 【実技・体験・紹介している機器】

- ・介護用ナノミストバス CARRY ナノミストバスヘッドスパ (株式会社アイン)
- ・シャワーオール NB2500 (エア・ウォーター株式会社)

### ■⑤リハビリ・トレーニング分野における活用について

9～10回目

- ・介護保険制度では、介護予防や要介護状態になっても介護度を維持・軽減する視点があることから、リハビリやトレーニング分野における介護テクノロジーを学ぶ。

#### 【実技・体験・紹介している機器】

- ・装着型サイボーグ HAL 腰タイプ 介護・自立支援用 (CYBERDYNE 株式会社)

### ■⑥その他 (ICTやコミュニケーションデバイス等) の介護ロボットや機器

11～12回

- ・記録システム、音声入力などのコミュニケーションデバイスを知る。
- ・機器や機能の種類が多様で絞れないため、講師が職場で導入している機器等を中心に紹介。

#### 【紹介している機器・機能】

- ・CAREKARTE、ハナスト (株式会社ケアコネクトジャパン)

### ■⑦「あなたは、どのような施設を造りたいか」

13～14回

～学生によるプレゼンテーション～

- ・介護ロボット、ICT、ノーリフトケア等を中心にした施設を造るとしたらどんな施設にしたいか。
- ・あなたは、どのような介護福祉士を目指しているか。

事例集の作成にご協力いただいた  
福祉系高等学校・介護福祉士養成施設及び関係者

福祉系高等学校

東奥学園高等学校	福祉科	真田 龍一 先生
宮城県迫桜高等学校	総合学科	四釜 千尋 先生
愛知県立古知野高等学校	福祉科	高木 諒 先生

専門学校

東北保健医療専門学校	介護福祉科	原田 由美子 先生 小巖 貴美子 先生
東京福祉専門学校	介護福祉科	高橋 利明 先生
	コニカミノルタ株式会社	古川 寛 様 関 泰彦 様

短期大学

富山短期大学	健康福祉学科	奥野 勝太 先生
--------	--------	----------

四年制大学

仙台大学	体育学部 健康福祉学科	堀江 竜弥 先生 後藤 満枝 先生 福田 伸雄 先生
桃山学院大学	社会学部 ソーシャルデザイン学科	川井 太加子 先生 杉原 久仁子 先生 黒田 隆之 先生 石井 亨宏 先生



---

令和7年度老人保健健康増進等事業  
介護福祉士養成課程におけるICTを活用した教育のあり方に関する調査研究事業

ICT等を活用した介護福祉士養成教育事例集  
介護福祉士養成教育におけるICT活用及び介護テクノロジー教育の推進にむけて

発行 令和8年3月  
公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会

113-0033 東京都文京区本郷 3-3-10 藤和シティコープ御茶ノ水 2階  
TEL : 03-3830-0471 FAX : 03-3830-0472



